

平成 28 年度

教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの
学習・指導方法の改善のための実践研究
報 告 書

徳島県立川島中学校・高等学校

アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に向けて

校長 林 博 子

本校は、併設型中高一貫教育校として11年目を迎え、学力と個性を伸ばし豊かな心と国際性を備えた人材の育成を基本目標に努めております。特に、学力に関しては、中高一貫教育校として単位制を導入しつつ「習熟度別学習」「少人数学習」を実施し、確かな学力の向上を図っています。

このような中、昨年度は「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「言語活動の充実に関する実践研究」の指定を受け、ホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングの実践研究に取り組み、生徒の主体的な活動や思考の活性化を図り学びの改善に取り組んでまいりました。このことにより、生徒が主体的に授業に取り組む姿勢が増えてくるとともに授業に対する教職員の意識が知識伝達型から生徒が主体的・協働的に学ぶというアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の方向性を認識するようになり、学習方法に対する理解が進んできたと思われまふ。しかし、生徒が課題発見・解決に必要な情報を収集し活用する力や情報を他者と共有しながら対話や議論をする力の定着に関しては大きな課題があることを実感いたしました。

このような課題解決のため、本年度より2年間文部科学省の「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に関する実践研究」の事業指定を受け引き続き研究を進めることといたしました。

本年度は、中高一貫教育の特性を活かして学校全体で協働する指導体制の構築を図るとともに生徒の実態に応じた適切な言語活動による授業改善及び評価のあり方等に取り組むことといたしました。教科は、中学校・高等学校とも全教科としていますが、特に、国語、地理歴史、公民、数学、総合的な学習の時間において重点的に取り組んでまいりました。12月には高校と大学の教育内容接続のための情報交換会において研究成果の発表、2月には、本校にて研究の実践報告を兼ね、重点的に取り組んできた教科の公開授業及び実践協議会を実施しました。参加の皆様方からのご意見もいただき、来年度への取組に生かすとともに、今後の県内の各学校における「学習・指導方法改善」への推進になればうれしく思います。本年度の研究の成果を報告書にまとめましたので、御覧いただければと思います。

最後になりましたが、本研究に際し御支援御協力をいただきました徳島県教育委員会、鳴門教育大学並びに先進校視察で訪問させていただきました皆様に心より感謝しお礼を申し上げます。

目 次

アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に向けて 校長 林 博 子

学校の概況	1
実践研究の概要	3
実践研究の内容	11
○研究授業・研究協議	
音楽科学習指導案	13
国語科（国語総合）学習指導案	18
地歴科（世界史B）学習指導案	22
数学科学習指導案	25
総合的な学習の時間 学習指導案	28
数学科学習指導案	32
総合的な学習の時間（グローバル）指導案	35
国語科（国語総合）学習指導案	37
地理歴史科（世界史B）学習指導案	39
数学科（数学I）学習指導案	41
総合的な学習の時間 学習指導案	44
○校内研修	
I フィールドワークを中心とした課題研究の進め方	46
II 実験・観察を中心としての課題研究の進め方	47
○ビブリオバトル	
「ビブリオバトル」実践報告	49
実施の効果と検証	51
先進校視察・フォーラム等参加報告	59
桐蔭学園高等学校	61

学校の概況

本校は、大正13年に徳島県立麻植中学校として設立され、幾多の変遷を経て、平成28年度に創立92年目を迎えた古い歴史と伝統を有する全日制普通科高校である。

平成18年度に併設の県立川島中学校が開校し、中高一貫教育校として、現在、11年目を迎えている。これまでに、併設型中高一貫教育校として、5回の卒業生を送り出し、一定の成果をあげている。

部活動は、運動部では、平成22年甲子園出場の野球部、県高校総体団体4年連続優勝の女子水泳部のほか、サッカー部、剣道部等が活発に活動している。

文化部では、囲碁将棋部、放送部、美術部が毎年のように全国大会に出場している。

また、併設型中高一貫教育校の特徴的な取り組みとして、次のようなものがある。

- (1) 中学校における高校数学の先取り学習
 - ・中学校3学年において、高校の教員が「数学Ⅰ」の授業を週3時間実施
 - ・「数学Ⅰ」は、中学校段階で履修完了
- (2) 中学校における週当たりの授業時数として32時間を実施（平成28年度より）
 - ・増時数を使って、数学、理科の先取り学習及び国語、社会の学力補強を実施
- (3) 中高間の教員の相互交流
 - ・中学校3学年学力向上対策の授業に高校の教員も参加
 - ・中学校教員が、高校の国語、理科において授業を担当
 - ・高校教員が、中学校の数学、英語、音楽、美術、家庭において授業を担当
- (4) 中高間の生徒の相互交流
 - ・中高合同の部活動の実施（運動部は中学校3学年の2学期以降）
 - ・中学校3学年学力向上対策の授業に高校の生徒が参加
 - ・中学生対象の進学説明会において、高校の生徒が高校生活について説明

在籍状況

(H28. 5. 1 現在)

	学年（年次）	生徒数	男子	女子
中学校	1 年	60	27	33
	2 年	60	29	31
	3 年	58	33	25
	中学校 計	178	89	89
高等学校	4 年	160	68	92
	5 年	156	67	89
	6 年	167	79	88
	高等学校 計	483	214	269
総 計		661	303	358

進路状況（合格者延人数）

	種 別	H24. 3月卒 (中高一貫1期生)	H25. 3月卒 (中高一貫2期生)	H26. 3月卒 (中高一貫3期生)	H27. 3月卒 (中高一貫4期生)	H28. 3月卒 (中高一貫5期生)
進 学	国公立大学	24	23	38	17	27
	私立大学	73	100	102	60	61
	短期大学	21	7	5	15	11
	専門学校	45	53	61	59	52
就 職	公務員	6	3	14	4	1
	民間就職	22	25	14	14	16

教職員数（H28. 5. 1現在）

	校 長	教 頭	指 導 教 諭	教 諭	養 護 教 諭	期 限 付 実 習 助 手	期 限 付 講 師	助 教 諭	補 充 講 師	非 常 勤 講 師	事 務 課 長	主 査	主 任	主 査（司書）	外 国 語 指 導 助 手	補 助 員	学 校 医 等
高等学校	1	2		32	1	1	1		1	7	1	1	2	1	1	2	5
中学校		1	1	11	1			1				1					
計	1	3	1	43	2	1	1	1	1	7	1	1	3	1	1	2	5

	国語	地歴 公民 (社会)	数学	理科	保健 体育	英語	芸術	家庭
高等学校	5	4	7	5	3	6	2	1
中学校	3	2	2	2	1	2		
計	8	6	9	7	4	8	2	1

※教頭を含む。臨時教員は含まない。

実践研究の概要

実践研究の概要

1 事業名

教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究（文部科学省委託事業）

2 趣 旨

次期学習指導要領の改訂の方向性を踏まえ、育成すべき資質・能力を教育課程全体の中で育むために、「教育課程企画特別部会 論点整理」における考え方を踏まえ、教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点から、学習・指導方法の不断の改善を図るための実践的な調査研究を行い、効果的な学習・指導方法の開発、優れた授業実践や校内研修の実施に取り組むとともに、その成果の普及を図る。

3 学校における言語活動に関する現状と課題

本校は、併設型中高一貫教育校として、学力と個性を伸ばし豊かな心と国際性を備えた人材の育成に努めている。特に学力に関しては、中高一貫教育校として、多様な生徒に対応するため、単位制を導入しつつ「習熟度別学習」、「少人数学習」を実施することで、確かな学力の向上を図っている。

生徒の学習態度は真面目で落ち着いており、熱心に授業に取り組むことはもちろん、週末課題、補習等に積極的に取り組んでいる生徒が多い。

しかし、指示されたことはできるが、「主体的に学習に取り組む態度の育成」ができていないと言いがたい。授業においても、講義式一斉授業の割合が多く、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」については、一定の成果を上げているが、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」については、不十分である。

こうした現状のなか、昨年度は「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「言語活動の充実に関する実践研究」の拠点校の指定を受け、ホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングの実践に取り組み、生徒の主体的な活動・思考の活性化を図り、学びの質の改善を図ってきた。

ホワイトボードを活用した授業実践では、当初は懐疑的であった教員の予想を超えて、生徒が主体的に授業に取り組む姿勢が増え、変化の兆しが見え始めたところである。

しかし、課題発見・解決に必要な情報を収集し活用する力や情報を他者と共有しながら対話や議論をする力の定着に関しては、まだまだ大きな課題がある。

さらに、アクティブ・ラーニングにおける評価についても、量的変化だけではなく質的变化を計ることや、生徒自身が個々の学びのプロセスを評価することなどができるようにする必要がある。

4 具体的な取組内容

(1) 生徒の「確かな学力」、特に「主体的に学習に取り組む態度」及び「思考力・判断力・表現力等」の育成を目標に、次の3点について実践研究に取り組んだ。

① 生徒の実態に応じた適切な言語活動による授業改善及び評価の設定

- ・中学校においては国語、社会、数学、総合的な学習の時間、高等学校においては国語、地理歴史、公民、数学、総合的な学習の時間の教科等（以下、重点教科と表記）において重点的に取り組んだ。
- ・昨年度の「言語活動の充実に関する実践研究」指定事業において、個人用のホワイトボード

(A3サイズ)を全校生徒、全教員分購入済みであり、今年度はさらにグループ学習における発表用のホワイトボード(A2サイズ)を整備した。

- ・主として重点教科において、アクティブ・ラーニングを取り入れた研究授業を2回実施した。
- ・研究授業の様子は、ビデオカメラで撮影し、授業研究会等で活用した。
- ・生徒及び教員対象のアンケートを複数回実施することで、生徒の実態、教員の意識の把握に努めた。

② 中高一貫教育の特性を活かして学校全体で協働する指導体制の構築

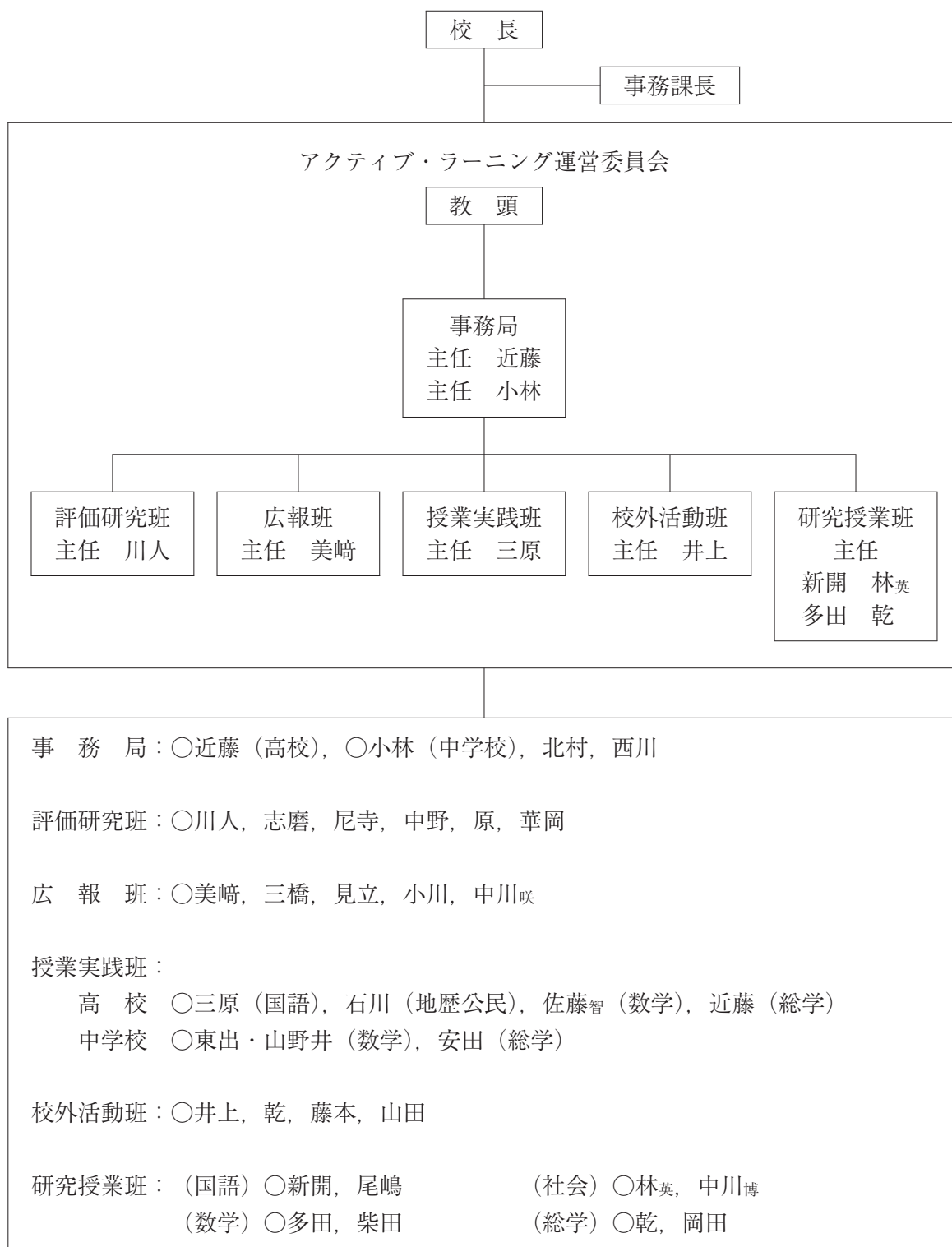
- ・中・高合同のアクティブ・ラーニング運営委員会において、課題や対策について検討するとともに計画の修正等について協議を行った。
- ・各教科における研究授業参観及び授業研究会は、中学校と高等学校の教員が合同で行った。
- ・異なる校種の教員から多様な意見を出してもらうことで、新しい視点で授業改善に取り組むことができた。
- ・生徒及び教員対象のアンケートの分析結果を中学校と高等学校の教員間で共有することで、相互理解を図った。

③ 地域との連携による多様な学びの場における言語活動の実践

- ・文化祭を地域に開放することで、展示や発表を通じた言語活動を、広く地域住民に行うことができた。
- ・地域の特別支援学校である鴨島支援学校の体育祭、文化祭にボランティアとして、それぞれ約10名の生徒が参加した。歌、ダンス、介助等の活動を通して、言語活動の充実を図った。

5 校内研究組織

1 組織図



2 役割内容

- 事務局
- ・アクティブ・ラーニング実践研究全般の企画・運営
 - ・実践協議会の企画・運営
 - ・消耗品購入の窓口及び消耗品の管理
 - ・高大接続情報交換会における発表準備
- 評価研究班
- ・実践研究前（9月）と実践研究後（12月）にそれぞれアンケートを実施
 - ・アクティブ・ラーニングの効果を定量的に検証
- 広報班
- ・研究報告書の作成
 - ・活動内容のホームページへの掲載
- 授業実践班
- ・校内における研究授業等の実施
 - ・実践協議会（2月）における公開授業の実施（中学校・高校）
- 校外活動班
- ・県外先進校視察の企画
 - ・県内アクティブ・ラーニング関連行事への案内
- 研究授業班
- ・研究授業の企画・運営（11月末まで）
 - ・県教育委員会から担当指導主事の派遣を依頼
 - ・研究授業のビデオ撮影
 - ・中高合同の授業研究会の実施

6 現在までの流れ

	中高一貫教育	学力向上検討委員会	アクティブ・ラーニングに関する研究
4月		19 学力向上検討委員会「学力向上実行プラン」作成 22 第1回教科会	
5月	6 第1回中高一貫教育推進委員会		
6月	9 第2回中高一貫教育推進委員会	9～17 第1回中高相互授業見学実施	
7月		8 第1回授業アンケート実施	
8月			

9月	7 第3回中高一貫教育推進委員会	16 第2回教科会（アクティブ・ラーニング） 20～27 第2回中高相互授業見学実施	23 第1回アクティブ・ラーニング実践協議会 アンケート（生徒・教員） （9月中）
10月	11 第4回中高一貫教育推進委員会		24 研究授業・音楽 25 研究授業・地歴 23 書評合戦「ビブリオバトル」徳島県大会
11月	30 第5回中高一貫教育推進委員会	第3回中高相互授業見学実施（～11月中）	7 研究授業・数学 8 校内研修・徳島大学内藤先生 11 校内研修・香川大学笠先生 19 ベネッセ主催研修会 12・13 学校訪問・桐蔭学園 15 特設スペシャル・アプローチ 28 研究授業・地歴 29 研究授業・国語 30 研究授業・総学
12月		5 第2回授業アンケート実施	13 第2回アクティブ・ラーニング実践協議会 26 あわ（our）教育発表会
1月	30 中高一貫教育アンケート実施（6年次対象）		
2月	15 第6回中高一貫教育推進委員会	17 第3回教科会（「学力向上実行プラン」の評価）	6 第3回アクティブ・ラーニング公開授業・実践協議会 7～10 国立教育政策研究所主催研究協議会 18 ベネッセ主催アクティブ・ラーニング研究会 上旬 アンケート（生徒・教員）
3月			中旬 研究報告書完成

実践研究の内容

研究授業・研究協議

校内研修

ビブリオバトル

音楽科学習指導案

徳島県立川島中学校

1. 履修単位数 1単位
2. 実施日時 平成28年10月24日（月） 第2時限
3. 学 級 2年2組（30名）
4. 使用教科書 音楽のおくりもの（教育出版）
5. 題材名 「ベートーヴェン 交響曲第5番」を鑑賞しよう
6. 題材設定の理由

本学級の生徒は、明るく活発であり授業にも活動的に取り組んでいるが、表現活動に対する恥ずかしさのためか消極的な生徒もいたり、逆に積極的になりすぎる生徒がいたりする。意識調査（別紙）でもわかるように、好きな音楽は興味をもって聴くが、クラシック音楽に対する意識には「難しい、古い」という傾向が見られる。そうした中で、2年次における鑑賞では、バッハの「小フーガト短調」を学習したところ、テレビCMや替え歌などで認識しているため、高い関心をもった取組ができた。曲想を感じ取る能力を養うことは、音楽の授業を行うにあたり大変重要なことである。本題材では、苦手意識をもつクラシック音楽の中でも比較的耳慣れた「ベートーヴェン 交響曲第5番 ハ短調」を取り上げる。本校は昨年度から、「言語活動の充実」を重点課題の1つとして、学校全体で取り組んでいるが、本題材でも言語活動を意識した活動を行い、聴いたことや感じたことを自分の言葉で説明し、様々な手段で伝え、表現できる力を育てたい。また、音楽の構成や特徴を知覚し、鑑賞する楽しさを味わわせたいと考え本題材を設定した。

7. 題材の目標

- (1) 「交響曲第5番ハ短調」の第1楽章を鑑賞し、楽曲の背景に興味・関心をもち、主体的に鑑賞に取り組む。
- (2) 楽曲の要素や構造と曲想の関わりを感じ、主体的に解釈したり言葉で表したりして、よさや美しさを味わう。

8. 新学習指導要領との関連

B 鑑賞 (1)ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

〔共通事項〕(1)ア リズム、構成
イ 拍子、動機

9. 教材

「交響曲第5番 ハ短調 作品67」から第1楽章 ベートーヴェン作曲（教育出版）

10. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
① 曲想の表情や味わいに関心をもち、曲にふさわしい表現を工夫する学習に、主体的に取り組もうとしている。 ② 楽曲の内容及び主題に関心をもち、曲全体がどのように表現されているのかを理解して聴こうとしている。	① 音楽の特徴や雰囲気を感じ取って、言葉で表現することができ、楽曲のよさや美しさを味わって聴いている。

11. 指導と評価の計画（全4時間）

	ね ら い	学 習 活 動	◇ 評価規準 ◆ 評価方法
第一時	○作曲者の生涯や作品の歴史的背景を知るとともに、音楽に興味・関心をもつ。	・ホワイトボードを使ってグループで話し合う。 ・まとめた意見はワークシートに書き込む。	◇音楽の歴史的背景に関心をもち、学習に主体的に取り組もうとしている。【関-①】 ◆観察法、ワークシート
第二時 本時	○楽曲の背景や構成を理解し、思いや意図をもって言葉で表現する。	・第1楽章を鑑賞し、主題を言葉で表現し、各自ホワイトボードに書く。 ・グループで話し合い、まとめたものを発表する。	◇楽曲の背景を理解し、曲にふさわしい表現を工夫して発表ができています。【鑑-①】 ◆観察法、発言発表、ワークシート
第三時	○音楽を形づくっている要素と音楽の特徴のつながりを理解させ全曲を通した構成を知る。	・楽譜を用いて「ソナタ形式」を理解し、音楽ワークにまとめる。	◇楽曲の特徴を理解し、主体的に鑑賞しようとしている。【鑑-①】 ◆観察法、ワークシート
第四時	○オーケストラの楽器の編成と楽器の特徴を知る。	・それぞれの楽器の特徴や役割などを知り、オーケストラの表現力の豊かさを学ぶ。	◇楽曲の構成と曲想とのかかわりを感じ取り、主体的に聴こうと取り組んでいる。【関-②】 ◆観察法、ワークシート

12. 学習指導の展開

(1) 本時の目標

- ・楽曲の構成要素・表現要素を意識して、適当な言葉を考えることができる。
- ・楽曲の曲想と構造の関わりに関心をもち、鑑賞する楽曲への学習に主体的に取り組んでいる。

(2) 展 開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準	評価方法
5分	1. 前時の復習を行い、本時のめあてを確認する。	・黒板に示し確認させる。		
	聴いて感じたことを言葉で表してみよう。			

25分	2. 楽曲の第1楽章を鑑賞し、第一主題と第二主題の構成について学ぶ。第一主題と第二主題から感じ取ったことや表現したい思いを言葉で表す。	・主体的に取り組むために全員にホワイトボードを用いた活動をさせる。	・楽曲の特徴を知覚し、自分の言葉で表すことができる。また、ワークシートにはどうしてその言葉になったかの根拠が書けている。 【鑑-①】	・観察 ・ワークシート
15分	3. グループで意見をまとめ発表する。	・まとめた意見はワークシートに書き込むよう指示する。		
5分	4. 本時のまとめと次時の予定を確認する。	・いろいろな表現方法を知ることによって鑑賞をより楽しいものにできることを伝える。		

(3) 評価及び指導（手だて）

(A)と判断される具体的な状況	・楽曲から想像したことや感じ取ったこととその根拠について自分の考えを具体的に書いている。
(B)と判断される状況を実現するための指導（手だて）	・「～のような感じがする」など、自分なりの言葉で表すように促すとともに「それはこの作品のどのようなところから感じたのか」を考えさせる。 ・「作曲者がなぜ、このような音楽で表現しているのか考えてみよう」など、学習に対する関心や意欲が高まっていくような視点で働きかける。

音楽に関する意識調査の結果

調査項目	はい 男	はい 女	合計
1. 音楽に興味・関心はありますか。	12人	14人	86%
2. 音楽の学習は好きですか。	9人	12人	70%
3. 歌うことは好きですか。	7人	12人	63%
4. 楽器を演奏することは好きですか。	6人	11人	56%
5. 鑑賞することは好きですか。	3人	8人	36%
6. 普段、クラシックは聴きますか。	2人	4人	20%

7. クラシック音楽のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 堅い, 古くて重い ・ 大人っぽい, かっこいい, おしゃれ ・ 眠たくなる, 難しい ・ ヴァイオリンがよく登場する ・ たくさんの楽器を使っていて美しい音色 ・ 勉強や寝るときに聴く ・ 深い音や浅い音など様々な音を交えて作っている
8. ベートーヴェンの曲で知っている曲	<ul style="list-style-type: none"> ・ 交響曲第9番 ・ 運命 ・ エリーゼのために
9. ベートーヴェンから想像する言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難聴 ・ 運命 ・ フロイデ ・ 顔が怖い ・ 七不思議 ・ ジャジャジャジャー
10. 作曲家で知っている人	<ul style="list-style-type: none"> ・ バッハ ・ モーツァルト ・ ショパン ・ ドビュッシー ・ シューベルト ・ ヴィヴァルディ ・ ブルクミュラー

研究授業の研究協議について

【研究授業を実施して】

今回、中学校での研究授業を行った。参観者の先生方から以下のような意見を頂いた。

- 言語がはっきりしていて発問もわかりやすい。生徒とのキャッチボールがうまくできている。ホワイトボードがうまく活用されていた（グループ学習や個人の意見を書き込む）。黒板にホワイトボードをかけられるのにも感心した。授業を通して今後、クラシックに興味をもってくれるといいと思った。
- これまでに学んだ内容を活用して、創造的な内容に取り組むなど、現在、本校が取り組んでいるアクティブ・ラーニングの授業になっていた。また、生徒が生き生きと主体的に学習に取り組んでいるところも良かった。
- 曲に歌詞をつけて、曲想を考えていくという授業の流れは、生徒の主体的な学びを引き出すことができ良かった。ホワイトボードで個の活動（ベートーヴェンの顔・ABの歌詞）→グループの活動（ABCDEの歌詞）の両方あったことも良かった。
- たいへんおもしろい授業であった。前時の学習した内容を生徒がよく覚えていることに驚いた。「よく前時のことを覚えていたね？」と聞いたら、「とてもおもしろかったから」という返事が

返ってきた。このような音楽の授業に取り組んでいくことで、クラシックがより身近に感じられるようになり、将来、普段の生活の中で「第5番」を聴くたびに今日の授業を思い出すだろう。

○ホワイトボードに顔を描いたり、曲に詩をつけたりとクラシックを敬遠せず楽しませる工夫がこんなにあるのかと勉強になった。

授業の最後で、いつもなら発言しない生徒が挙手をして自分の意見を発表した。ホワイトボードを使った活動では、日頃自分の意見を言葉に出しにくい生徒も笑顔でいきいきと授業に参加できていた。また、今後、ファシリテーターを中心とした活動を実施できるようにチャレンジしていきたい。生徒の張り切る様子を見ると、参観授業の大切さを改めて感じた。

【今後の課題とその改善方法】

- ホワイトボードでの発表では、濃く大きく書く指導や、グループでの話し合いの最後、再度協議をして修正することも必要。
- 音楽的要素（音楽を形づくっている要素）との関連がもう少しあった方が良い。
- 最後にもう一度、個の活動（ABCDEの歌詞から曲想を言葉で表現）があれば、生徒の表現力のアップにつながると思う。
- 残念なのは、ABA……との歌詞がつながるようにしなければいけないことを理解できていない生徒が多かったこと。ワークシートの改善、工夫を今後も研究して欲しい。

以上のようなアドバイスを頂いた。時間が気になってもう一度最後に確認させることやグループでの話し合いの時間がとれなかったのが、次回から展開の最後の部分まで考えた授業展開を行いたい。また今回、歌詞を考えるためにふったアルファベットが複雑だったため理解できない生徒が多くいた。中学生の実態にあわせたワークシートの作成など、改めて改善していく点がたくさんある。これからも、子どもたちが主体的で対話的に授業に参加できるような授業展開を考え、どんどんと取り組んでいきたい。

また、アクティブ・ラーニングを意識した授業を、今後他の学年でも取り入れ、音楽に苦手意識のある生徒に少しでも音楽の楽しさを伝え、音楽を愛好する心情をはぐくむとともに、音楽に対する感性をより一層豊かなものにするための授業展開を思考し、工夫改善していきたい。



国語科（国語総合）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 5 単位
2. 実施日時 平成28年11月29日（火） 第5 時限
3. 学 級 4 年 4 組（30名）
4. 使用教科書 高等学校 国語総合（第一学習社）
5. 単元名 文章の構成や展開を確かめ書き手の意図をとらえる（徒然草『九月二十日のころ』）

6. 単元設定の理由

〈生徒観〉前向きな生徒が多く、学習に対して意欲的に取り組む生徒も多い。しかし古典の授業となると苦手意識を持つ生徒が多く、内容の読み取りに終始してしまいがちであるため、他者との協同や相互作用を通じて自らの考えを広げ、深める対話的な学びの必要性を強く感じている。

〈教材観〉「古文入門」以降、生徒は古文の特徴、歴史的仮名遣い、基本的な古語の意味、用言の活用、係り結びの法則など古文の基本的な事項を一通り学習してきた。「ある人弓射る事を習ふに」では人生における教訓を読み取り、その教訓が現代の私たちの生活の中にも息づいていることを認識した。「九月二十日のころ」で更に読解を深め、兼好法師の考える「四季折々の自然の美しさが人間の生活に取り入れられ、豊かな日本文化を形成していたこと」を文章中の言葉や当時の生活様式を取り入れながら考えさせたい。

〈指導法〉単元の最終目標は第三者に効果的に紹介する「九月二十日のころだより」を書くことである。5人が1つのグループになり、デザイン、内容紹介、教訓、表現や登場人物のおもしろさ、どんな人に読んでもらいたいのか、など役割を決め模造紙にまとめて発表する。生徒にとって、身につけた知識が定着すること、多様な表現にふれることで古典の世界と現代を結びつけさせたいと考え、本単元を設定した。

7. 単元の目標 領域 【読むこと】

- (1) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- (2) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりする。 (読む能力) 内容(1)のエ
- (3) 文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。 (知識・理解) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)のイの(イ)

8. 取り上げる言語活動

- ・文章に書かれた情景や心情、ものの見方を的確にとらえ第三者に紹介文を書く。

9. 単元の評価規準

- A 文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察しようとしている。 (関心・意欲・態度)
- B 文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察している。 (読む能力)
- C 随筆における表記、語句、語彙、文法の特徴について理解している。 (知識・理解)

10. 指導計画（全時間）

次	学 習 活 動	評価の規準と方法
1次 5時間	文章の構成や展開を読みとる。	評価規準C「記述の点検」
2次 2時間	文章の構成や展開を確認する。 グループ活動（2／2本時）	評価規準B「記述の点検」
3次 2時間	文章の効果的な表現について考察し、学習を振り返り、第三者に紹介文を書く。	評価規準A「行動の観察」
4次 1時間	第三者に紹介する紹介文をクラス全体で発表する。 グループ活動	評価規準A「記述の点検」

11. 本時の目標と評価規準

文章の構成や展開を確かめ、登場人物の心情や情景が効果的に表現できているかを考察している。
（読む能力）

12. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準と実際	評価方法
導入 5分	本時の目標を聞く。	目標を説明する。		
展開 40分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">1 本文を読み、現代語訳を参考にしながら内容をとらえる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">2 登場人物が関わる情景を考え、表現の効果について考察しワークシートに書き込む。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">3 グループで話し合った後、発表する。</div>	<p>グループの中で音読することを指示する。</p> <p>根拠となる部分を本文中から現代語訳で抜き出すように指示する。</p>	<p>「読む能力」 文章の構成や展開を確かめ情景や登場人物の心情、もの見方を的確にとらえ、効果的に表現しているかを考察している。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;">Cの生徒への指導の手立て 内容をとらえられていない生徒には、ヒントになる語句を指示する。</div>	記述の点検
まとめ 5分	本時の学習内容を確認する。	<p>新たな気づきがあったかどうかを振り返らせる。</p> <p>次回から紹介文の作成に入ることを伝える。</p>		

【授業後の研究協議について】

(授業者より)

比較的短い古文の文章なので、生徒は内容の理解にそれほど時間がかからないのではと考えていたが、現在の時代背景や、文化的背景の違いが予想以上に大きく、生徒には読み取りにくいものだったようだ。月見をする習慣が現在は薄れてきており、また女性を垣間見することなどは予想もできなかったようだ。一方では新たな気づきになった、という生徒もおり、現代と古典の世界をつなぐ必要性を更に感じた。月を愛でること、女性の優雅な振る舞い、無常観など、短い文章の中に日本古来の奥ゆかしい文化が感じ取れる文章である。今回は無常観についての表現と登場人物の魅力に触れることを意識した。本文中の言葉に根拠を求め、登場人物の関係性を読み解くことがテーマである。特に意識したのは生徒への発問である。3つの発問に絞り、最後の質問が無常観へとつながるクライマックスとなる質問であった。

(研究協議の内容)

内容の読み取りができていない生徒がいたので、内容を図式化したフローチャートで示すとよかったのではないかと。最初のペアワークで本文の読みを行ったのは生徒の主体的な取り組みにつながったのではないかと。ワークシートが細かく準備されていてよかった。

内容の読み取りの準備としてマンガを取り入れていた。「九月二十日のころ」の前後の章段を紹介していてよかった。前後の章段を紹介することでテーマである無常観に触れるきっかけができたのではないかと。作品に描かれている当時の様子を想像するのは生徒にはとても難しいと思われる。

グループ学習の中で各自が自分の意見を述べる時間をとってから、グループでの話し合いにもって行けばよかった。自分の意見も書きとめて思考が深まる過程を可視化できるように付箋をつかった話し合いが適切だと思う。1グループ5人なので各自に司会・書記などの役割分担が必要である。

発表の際には発表者が教卓前に立ち、生徒に向かって話すことが大切だ。授業者のフォローを期待しているようなので、すべて生徒に任せてみてはどうか。そのためには事前に生徒に発表についてのルール立てをしておくことが大切だ。

(授業者の感想)

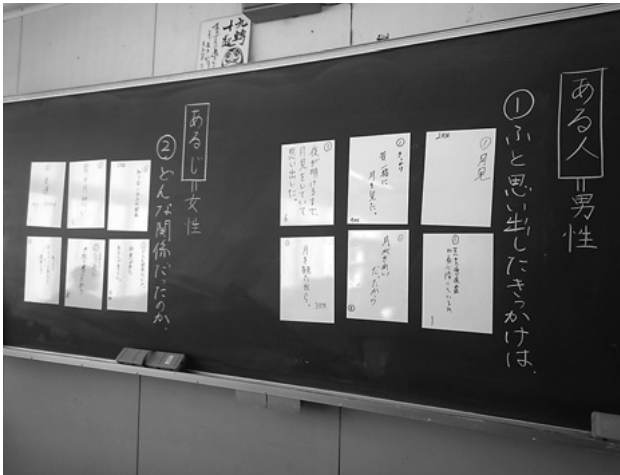
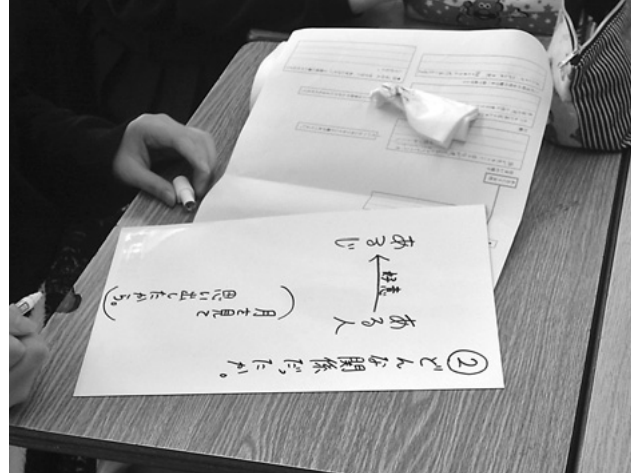
今回は生徒の読みを深めるため、思考することに重点をおいた。発問によって生徒の思考が左右されることを頭にいれながら用意した3つの発問は、妥当であったと考える。しかし思考の過程を可視化するための場の設定ができておらず、次回への課題としたい。

(研究授業後の生徒の感想)

- ・「ある人」が「ふと思い出したきっかけ」なんて考えていなかったけれど、考えてみると文章に書かれていないことまで考えることができて楽しかった。
- ・今と昔では少し違うけれど誰かを思う気持ちは変わらないんだと思った。
- ・男性が女性の家に通うことが当時の恋愛の形だとは知らなかった。
- ・昔ある人と女あるじが一緒にお月見をしたから月を見ていたある人があるじを思い出してお家に行ったのかなと思って素敵だなと思った。
- ・物語の内容や主人公の気持ち、関係などを自分たちで考えるのが楽しかったし、文章に色々な意

味がこめられていることが分かったのでよかった。

(授業の様子)



地理歴史科（世界史B）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 3 単位
2. 実施日時 平成28年11月28日（月） 第5 時限
3. 学 級 6 年 5 組（14名）
4. 使用教科書 詳説 世界史B（山川出版社）
5. 単元名 戦後世界秩序の形成とアジア諸地域の独立
6. 単元設定の理由

〈生徒観〉明るく活発な生徒が多く、クラス全体として積極的に授業に取り組んでいる。知識を問う発問には教科書や資料集を探して何とか答えようとしているが定着度は低く、歴史的事象の推移や変化を捉えることを苦手としている。いかに生徒の気付きを促し、歴史的思考を深めさせるかが課題である。

〈教材観〉第一次世界大戦後の反省に立ち第二次世界大戦後は新たな体制が構築されたが、ここでも大国の利害によって様々な課題が残った。第一次世界大戦後と第二次世界大戦後の体制の違いや共通点を考えることで過去の歴史や諸政策を振り返り、現代の諸課題の解決に向けて考察する力を身に付けさせることができる単元である。

〈指導観〉この単元では、これまで学習してきた知識を活用し戦前との比較によって、戦後国際秩序の形成過程や課題について考察させたい。また、様々な資料を用いたり現代まで続く問題に気付かせることで、現代の問題に興味をもち、自ら学ぼうとする意欲を育てる契機としたい。

7. 単元の目標

戦後世界秩序の形成とアジアの諸地域の独立について関心を高め、戦後の世界の動向や社会の特質についての基本的な事柄を理解している。また、諸資料から読み取った情報をもとに、戦間期の反省と戦後国際秩序の形成や平和の実現に向けた取組との関連や、アジア諸地域の独立と大国の利害との関連を考察し、事象同士の因果関係等について適切に表現できる。

8. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
戦後の世界秩序の形成、アジア諸地域の独立など、現代世界に対する関心を高め、地球世界の課題を、歴史的観点から追究しようとしている。	戦後の世界秩序の形成、アジア諸地域の独立について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	現代世界に関する各種の情報や資料の収集・選択・活用などを行い、有用な情報を選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	戦後の世界の動向と社会の特質を理解し、その知識を身に付けている。

9. 指導計画

戦後世界秩序の形成とアジア諸地域の独立 全5 時間

第1次 戦後世界秩序の形成 2 時間

- 第1時 大戦の反省…………… 1 / 2 【思】 【知】 (本時)
 第2時 戦後世界秩序の形成…………… 1 / 2 【関】 【技】
 第2次 米ソ冷戦の始まりと東西ヨーロッパの分断…………… 1時間 【知】 【技】
 第3次 アジア諸地域の独立…………… 2時間 【関】 【思】

10. 本時の目標

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
	第一次世界大戦後の問題点を踏まえ、平和の実現のためにはどのような方法や制度が必要かを考察している。		講和条約の内容や国際連盟の在り方が、敗戦国や植民地にとって不満となったことを理解する。

11. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
導入 10分	なぜ第一次世界大戦後に平和は訪れなかったのか？			
	○第一次世界大戦から第二次世界大戦までの流れを復習する。	○世界が大きな被害をもたらした第一次世界大戦を経験したにもかかわらず、21年後に再びそれを上回る戦争を起こしたことに着目させる。		
展開 30分	第一次世界大戦後の世界秩序は何をもたらしたのか？			
	○戦間期の問題点について考える。	○第一次世界大戦後の体制は一部の国の利害が優先され、不満を持つ国もあったことに注目させる。	○国際連盟の在り方や戦勝国中心の体制に注目し、そのことが新たな対立を生み第二次世界大戦を招いたことを理解している。 (知識・理解)	行動観察 ワークシート の記述
	第二次世界大戦後の世界秩序構築には何が必要だろうか？			
	○世界平和の実現に向けて必要なことを話し合う。	○情緒的にならずに、戦間期の問題点を踏まえて、グループ討議させる。	○問題点を具体的にどのように改善すべきかを適切に表現し、グループで協働して解決策を見いだそうとしている。 (思考・判断・表現)	行動観察 ワークシート の記述

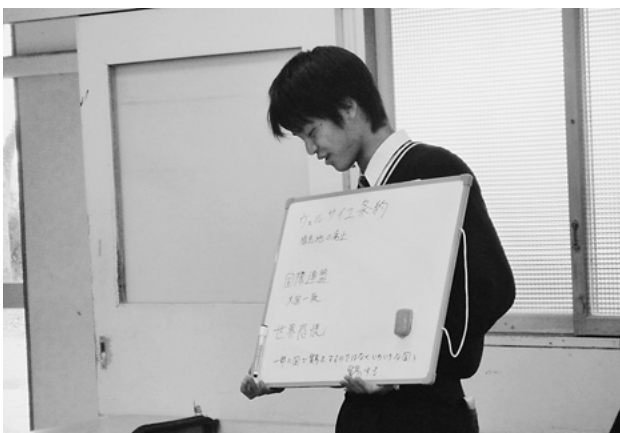
まとめ 10分	○戦後世界の平和実現にむけた取組について、次時からの学習の見通しを持つ。	○ユネスコ憲章の前文をとりあげ、戦後世界が求めた平和について説明する。		
------------	--------------------------------------	-------------------------------------	--	--

12. 活動の様子

今回はグループでの活動がスムーズに進むよう付箋を利用した。まず付箋に個人の考えを書き、それをホワイトボードに貼りながらグループ内で発表し意見をカテゴライズしていった。こうすることで普段はなかなか発言できない生徒も意見を出すことができ、それぞれが役割を果たすことができた。このカテゴライズから各グループでテーマを決定し、それについて教科書や資料集を利用して話し合いを行った。



13. 研究協議



今回はこれまでの学習で得た知識をもとに、戦間期を振り返り問題点を考えさせた。生徒は一生懸命に活動していたが、新たな資料等を用意しなかったため、生徒は自分の知識だけでは不安そうであった。生徒がより活発に意見を出し合えるように、もう少し授業者側の工夫が必要だったとの反省が残った。

十分なグループ討議をさせることはできなかったが、寒川指導主事からは「アクティブ・ラーニングは活動そのものが目的ではないので、生徒が自主的に考え、しっかり頭を回転させていたという点を評価すべき。」と助言をいただいた。また、「生徒はグループ討議の中でいろいろな意見を出していたので、発表時に『なぜそう考えたのか』『その根拠は』など深く掘り下げることでより理解を深めることができたのではないかと指摘していただいた。授業の形はまだ発展途上であるが、生徒が将来にわたって必要となる力を身に付けられるよう私自身も研修を重ねていきたい。

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 4 単位
2. 実施日時 平成28年11月7日（月） 第3時限
3. 学 級 4 年 2 組（33名）
4. 使用教科書 新編数学Ⅰ（数研出版）
5. 単元名 第3章 図形と計量 第2節 三角形への応用 4. 正弦定理
6. 単元設定の理由

42HRの生徒は、自力で問題に取り組もうとする姿勢はあるが、他の生徒と話し合っ、粘り強く、課題解決をしようとするのが苦手であったり、数学に苦手意識を持っていたりする生徒が多いように感じられる。そのため、班別で学習する活動を積極的に授業に取り入れ、他の生徒と話し合っ、学習する意義や数学の楽しさを体験することが必要と思われる。また、正弦定理は、意味や成り立ちが理解しにくいので、丁寧に時間をかける必要がある。そこで、生徒に実測させたり、他の生徒と定理を証明し合ったりさせることで、定理の面白さや成り立ちを実感させるとともに、他の生徒と協働しながら、問題解決を図る力を育成したいと考えている。

7. 単元の目標

- ・正弦定理の図形的な意味を考察し、三角形の外接円、円周角と中心角の関係などから、正弦定理を導くことができる。
- ・正弦定理が、平面図形の計量に有用であることを認識するとともに、平面図形の計量に活用できる。

8. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
○正弦定理の図形的意味を考察する。 ○三角形の外接円、円周角と中心角の関係などから、正弦定理を導こうとする。	○正弦定理を測量に応用できる。	○正弦定理における $A=B=C=D$ の形の関係式を適切に処理できる。	○正弦定理を利用して、三角形の外接円の半径、辺の長さや角の大きさが求められる。 ○正弦定理を測量に応用できる。

9. 指導計画

- 第1次 正弦定理…………… 2 時間
- 第1時 正弦定理（本時）
- 第2時 正弦定理の利用

10. 本時の指導目標

- ・正弦定理の成り立ちを理解させ、その有用性を実感させる。
- ・主体的に他の生徒と協働して、問題解決を目指す態度を身につけさせる。

11. 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準	評価方法
導入 (2分)	○本時の学習内容を知る。	○本時の学習内容を知らせる。		
展開Ⅰ (26分)	<p>Q 1. 半径を定めて、円を描け。そして円周上に任意の3点を取って△ABC を作り、$a, b, c, \angle A, \angle B, \angle C$ を測り、$\frac{a}{\sin A} = \frac{b}{\sin B} = \frac{c}{\sin C}$ の値を計算せよ。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートⅠに従って、班ごとに、コンパスや定規、分度器、電卓、三角比の表を用いて作業をすすめ、求めた値を黒板に書く。 ○全ての班の結果から、分かることを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○机間指導し、適宜ヒントを与える。 ○早くできた班には誤差を小さくさせたり、他の班を手伝ったりするように指示する。 ○全ての班の結果から $\frac{a}{\sin A} = \frac{b}{\sin B} = \frac{c}{\sin C} = 2R$ が成り立っていることを予想させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○班別の活動に積極的に参加できているか。 (関心・意欲・態度) 	○行動観察
展開Ⅱ (20分)	<p>Q 2. $\frac{a}{\sin A} = 2R$ を証明せよ。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> ○まなボードを持っている生徒は、$\angle A$ が鋭角の場合の証明について、教師の説明を聴く。 ○まなボードを持っている生徒は、ペアの生徒に、まなボードを使って、説明する。 ○説明を受けた生徒は、別の班員にまなボードを使って、説明する。 ○各自、ワークシートⅡの空欄を埋める。 ○ワークシートⅡの解答の答え合わせをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まなボードを持っている生徒に、$\angle A$ が鋭角の場合の証明について、説明する。 ○まなボードを持っている生徒に、ペアの生徒に説明させる。 ○説明を受けた生徒に、別の班員に説明させる。 ○必要に応じて、班内で助け合うように指示する。 ○$\angle A$ が直角、鈍角の場合の証明を次時までの課題として与える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○積極的に他の生徒に説明したり、話を聞いたりできているか。 (関心・意欲・態度) ○三角比の性質を理解し、それを利用して正弦定理の式を作ることができるか。 (知識・理解) 	<ul style="list-style-type: none"> ○行動観察 ○ワークシート
まとめ (2分)	○本時の振り返り、自己評価をし、提出する。	○生徒各自に自己評価をさせる。		

【指導上の工夫と課題】

- ・数学が苦手と感じている生徒が多く、またコミュニケーション能力が不足していると感じているため、グループワークを通して話し合いをさせたかった。
- ・言語活動の充実を図りたいので、証明をペアで説明させた。全員に説明をさせたかったが、そのような働きかけが十分ではなかった。
- ・正弦定理の導入で本当は鈍角まで授業で扱いたかったが、本時の展開では難しいと感じた。
- ・本校にあるまなボード（生徒がもつホワイトボード）を有効に活用させたかった。
- ・円周角の定理が定着しきっていないので、授業においても復習をした上で課題解決をさせた。

【授業後の研究協議について】

- ・授業の流れはよいものであった。
- ・生徒もメリハリをもって授業を受けていた。
- ・グループワークなどが円滑に行えたのは事前指導のたまものであると感じた。
- ・まなボードを有効に活用していて、理解を深めるのに役立っていると感じた。
- ・机の置き方や実物投影機など随所に工夫がみられた。
- ・授業内容を生徒が分かっているのかを確認して次に進んだ方がよい。
- ・班活動をするときには、班で役割分担を決めた方がよいのではないか。
- ・間違っている生徒がいる状況で次に進むのはまずい。
- ・生徒の発言が多少予想していたものと違っていても、その意見を尊重して授業に生かすべきである。
- ・自己評価をさせて授業が終わったが、本時のまとめはすべきである。
- ・グループで作業を行うので、授業者の指示が通りにくい場面があった。全員に指示が通るように、注意を促してから指示は出すべきである。
- ・アクティブ・ラーニングを意識した授業であるが、アクティブ・ラーニングでは今日は何を学び、何をしたのかを書かせたり、発表させたりすることが大切であり、今回の授業ではそれが足りない。
- ・結果から予想されることが難しいと感じている生徒がいたが、円の半径を自由に決めさせるのではなく、10cmで固定したのであれば、もっと結果から予想がさせやすかったのではないか。
- ・問題を解くヒントを与えていたが、ヒントをワークシートにも書いておいたほうが良い。授業で行ったことが形に残るように工夫するべきである。

総合的な学習の時間 学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 1 単位
2. 実施日時 平成28年11月30日（水） 第3 時限
3. 学 級 4 年 1 組（33名）
4. 使用教材 高校生のための「研究」ノート（学事出版）
5. 単元名 「課題研究」の方法を学ぼう
6. 単元設定の理由

本校では「総合的な学習の時間」において、生徒一人一人の自己実現のために、「生きる力」を身につけさせ、社会に貢献できる人物を育成することを目標としている。物事に対して問題意識を抱き、自らの身近な事柄にも「課題」を見出す課題発見力は、現代の高校生にこれから求められる力の一つである。生徒達は、中学校で調べ学習の経験を積み、資料を収集して模造紙にまとめ、発表するという一連の流れを身につけている。しかし、調べた情報を羅列することに止まり、そこに課題を発見して考察するまでに至らないことが多い。そこで、これまで身につけた調べ学習のスキルをさらに発展させ、他者と協働しながら課題研究に取り組む基礎を培うために、本単元を設定した。

7. 単元の目標

- ・職業に関する調べ学習および発表にグループで協力して取り組むことができる。
- ・課題研究における「課題（テーマ）設定」の方法を身につける。

8. 単元の評価規準

A 職業調べの発表に対する「質問」の作成や、課題研究のテーマ設定ができる。

【よりよく問題を解決する資質や能力】

B 進路選択に関わる職業や、身近な学びの素材である校歌について、新しい知識や見解を得ることができる。

【学び方やものの考え方】

C グループ活動の中で、自分の役割を見つけて参加できる。

【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】

D 自分の興味がある分野の職業について調べたり、好きな教科から「課題」にアプローチしたりすることによって将来を意識して学ぶことができる。

【自己の在り方生き方】

9. 指導計画

次	学 習 活 動	評価の規準と方法
1 次 3 時間	グループで職業調べを行い、模造紙にまとめて発表する。	評価規準 A・C・D 「行動の観察」 「自己評価」
2 次 1 時間 (本時)	職業調べの発表に対する「質問」を考え、調べ学習と課題研究の違いを学ぶ。	評価規準 A・B 「記述の点検」 「行動の観察」
3 次 3 時間	川島高校の歴史や地元の風土に関わる「校歌」について課題研究のテーマを設定し、研究計画を立てる。	評価規準 A・C 「記述の点検」 「行動の観察」

10. 本時の目標

- ・ 職業調べの発表に対する「質問」を挙げ、グループでまとめて発表することができる。

【よりよく問題を解決する資質や能力】

【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】

11. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
導入 (5分)	前時を想起し、本時の目標を確認する。	パワーポイントのスライドで目標を示す。		
展開 (40分)	<p>1. 「職業調べ」で優勝した2グループ（A班・B班とする）の模造紙と発表原稿を見て質問を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まず、各自それらの職業の背後にある「社会問題」を考える。（3分間） ・ 「質問」を最初は個人で考える（3分間）。 <p>・ 次にグループで意見を共有し、グループとしての質問をホワイトボードにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「調べたらすぐにわかる」ものと、「研究テーマになるもの」に分類する。（10分間） <p>2. グループで作成した「質問」を発表する。</p> <p>3. 「調べ学習」を「課題研究」に発展させる方法について知る。</p> <p>4. 「職業調べ」の研究テーマを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 模造紙を黒板に貼っておく。 ・ パワーポイントのスライドで発表原稿の要点を示す。 ・ ワークシートとマジック・付箋を配布し、各自が思いつく質問を書き出させる。 ・ タイマーで時間を知らせる。 ・ 適宜時間を延長する。 ・ グループのホワイトボードに各自の付箋を貼るよう指示する。 ・ ホワイトボードの付箋の配置、レイアウトはグループで自由にする。 ・ ホワイトボードを使用させる。 ・ パワーポイントで示し、ワークシートに記入させる。 ・ ワークシートに各自記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 模造紙と発表原稿を見て、「質問」を考えることができる。【よりよく問題を解決する資質や能力】 <p>Cの生徒への指導の手立て パワーポイントでポイントを強調するとともに、「もっと聞きたいこと」「疑問に思ったこと」を挙げるように個別に声をかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループの話し合いに積極的に参加しようとしている。【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】 <p>Cの生徒への指導の手立て グループ活動に参加できていない生徒には、自分の意見を確認し、他の人の意見もよく聞くよう促す。</p>	<p>行動の観察 記述の点検</p> <p>行動の観察 記述の点検</p>
まとめ (5分)	本時の学習内容を振り返り、自己評価を行う。	・ ワークシートの自己評価欄を記入、提出させる。		

12. 活動の様子と内容

① 説明



② 活動（各自）



③ 活動（グループ）



④ 付箋の分類



⑤ まとめ



⑥ 発表



職業調べの発表に対する「質問」を考え、それらを「調べたらすぐにわかるもの」と「研究テーマになるもの」に分類する活動を通して「調べ学習」と「課題研究」の違いについて学習した。各自が考えた質問を付箋に記入し、次にグループで話し合いをしながら分類を行った。色分けした付箋をホワイトボードに貼り付けることで、思考の結果を可視化することができた。さらに、分類した理由について考察することによって、「研究テーマ」の設定において、「疑問」を持ち「課題」を発見することが重要であることや、その「課題」を解決あるいは明らかにするという「目的」をもって行うのが「課題研究」であるということについて、より深く学ぶことができたと考えられる。

なお、発表の際のホワイトボードの使い方については、文字の大きさや記入の仕方などの指示が必要だったので、今回は改善したい。

13. 研究協議において

(県教育委員会 指導主事より)

- ・評価の観点・評価規準については、学校で設定している「総合的な学習の時間 年間指導計画」をもとに作成する必要がある。総合的な学習の時間はカリキュラムを各学校で編成しなければならない点に大きな特徴があり、評価規準についても学校教育目標に沿ったものを学校独自に設定する必要がある。川島高校で設定されている評価規準は、国立教育政策研究所から出されている「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校）」の内容を踏まえたものとなっており、適切であった。また、今回の授業も、学校教育目標や、学校設定の評価規準を満たすための内容になっており、適切であった。
- ・付箋をホワイトボード上で整理する際、生徒はそれぞれのグループごとに自分なりに考えた工夫を行っており、生徒の思考が可視化されるという点で、この活動は意義あるものであった。思考が可視化されることで、考えたことがグループやクラスで共有され、それにより個人の考えも深まった。このような活動は、総合的な学習の時間で重視されている「探究活動」で、まさにねらいとするところとなっている。総合的な学習の時間では、様々な活動をさせることのみで終始しがちであるが、一連の活動の中で学びの意味をどのようにして子どもに見える化し

ていくかということも大切である。

- ・導入→展開→まとめ→評価という授業の構成や時間配分がすっきりとまとまっており、授業者の指示、生徒への問いかけが適切に行われていた。また、指示することを最小限とし、生徒の主体的な活動や独自の考えをうまく引き出そうとしていた点も適切であった。授業の中でアクティブ・ラーニングを実現するためには、教員の『こうしたい』という思いが出すぎると、子どもの「こうしたい」がなかなか生まれてこないことに留意しなければならない。

2016年11月30日(水) 3限目 41HR

総合的な学習の時間～課題研究の方法を学ぼう～

発表内容の確認・分析をしよう

★発表原稿の詳しい内容と模造紙についてはワークシートで確認しよう

B班 「法務教官って何だろう」発表内容

- ・法務教官の仕事内容
- ・この仕事につくための進路
- ・必要な学問について
- ・心理学について

☆今日の目標

福祉を通して人を支援する(仕事)

法務教官って何だろう?(人の成長を助ける仕事)

二つの班の発表に対する質問を考えよう

質問を考えてみよう

①各自で考える

→A班への質問は水色のふせんに書く

→B班への質問は黄色のふせんに書く

(3分間)

②グループで考える

活動1: 各自のふせんをグループのホワイトボード(話し合い用)に貼る

活動2: ホワイトボード(発表用)に、各グループへの質問を1問ずつ書く

(10分間)

発表内容の確認・分析をしよう

★発表原稿の詳しい内容と模造紙についてはワークシートで確認しよう

A班 「福祉を通して人を支援する」発表内容

- ・この仕事につくための進路
- ・初めて耳にした職業や興味ある職業を調べた
- ・介護職員について
- ・ケースワーカーについて

「調べ学習」から「課題研究」へ

- ・「調べ学習」では、収集した情報を整理し、わかりやすくまとめることが大切である。
- ・その発表やまとめ方には、調べた人の考え・意図があるが、さらに疑問点を挙げることで深く追究することができる。
- ・情報に対して「なぜ○○か？」などの「疑問」を持ち、そこにある「課題」を発見し、それを探究し解決あるいは明らかにするという「目的」を持って行うのが「課題研究」である。

数学科学習指導案

徳島県立川島中学校

1. 実施日時 平成29年2月6日(月) 第5時限
2. 学級 3年1組(29名)
3. 題材名 「入試問題にチャレンジしよう」
4. 題材設定の理由

① 教材観

図形の指導において、第1学年では、観察、操作や実験などを通して、図形についての直感的な見方や考え方を深めることを中心としながら、論理的に考察し表現する能力を培う。第2学年では、基本的な平面図形の性質について、観察、操作や実験などを通して、見通しを持ち論理的に考察し表現する能力を養う。第3学年では、観察、操作や実験などを通して、図形の定理などを理解し、それらを図形の性質や計量に用いる能力を伸ばすとともに、見通しを持ち論理的に考察し表現する能力を伸ばす。入試問題は、中学校3年間の総まとめといえる問題であるので身につけた数学的知識や技能をどのようにつなげていくのか見通しを持って考える能力を伸ばす。

② 生徒観

本学級の生徒は、課題に対してまじめに集中して取り組むことができ、基礎的・基本的な知識はある程度身に付けている。しかし活用の場面において、これまで学んだ何を用いて解決すればよいかのわからず問題を解決するための筋道を予想できていない生徒は多い。そこで、図形の学習において、類題を用いて既習事項のどれを用いて解決しているのかを意識させる授業を展開し、生徒が主体的に課題に取り組むことができるように指導している。

③ 指導観

昨年度より、ホワイトボードを使い自分の意見や考え方を伝え合う活動を行ってきた。このホワイトボードを活用し、生活班と研究班にわける。生活班で担当を決め、研究班では同じ課題について協力して解く。再び生活班に戻り説明することで、一人一人が意欲的に取り組むことができるように工夫している。

5. 題材の目標

図形の合同や相似、円周角の定理や三平方の定理について理解し、それらを図形の性質の考察などに利用し、見通しを持って論理的に考えることができる。

6. 題材の評価規準

数学への関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	数量や図形などについての知識・理解
数学的に考え表現することに関心を持ち、意欲的に問題の解決に取り組もうとしている。	基礎的・基本的な知識や技能を活用しながら、事象に潜む法則等を見だし、筋道を立てて考えることができる。	合同な図形や相似な図形の意味などを用いて、角の大きさや辺の長さ等を求めるなどの技能を身につけている。	図形についての様々な事柄等の意味を理解している。

7. 指導と評価の計画（全2時間）

小 単 元 等			授 業 時 間 等			
図形の入試問題にチャレンジしよう			2時間		2時間	
時	ねらい	学習活動	評価規準・評価方法			
			数学への関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	数量や図形などについての知識・理解
1	具体的な問題を、既習事項を用いて解決することができる。	図形についての既習事項を用いて問題に取り組む。	○図形の性質などの基礎的・基本的な既習事項を問題の解決に生かそうとしている。〔観察〕	◎課題解決の道筋を予想し、それが正しいことを既習事項に帰着させて考えることができる。〔観察・ホワイトボード〕		
2		前時の学習をもとにして、入試問題に取り組む。			◎既習事項を用いて問題を解くことができる。〔ワークシート〕	○図形の知識を用いて問題を解決する手順を理解している。〔観察・ワークシート〕

8. 本 時

(1) 目 標

図形の性質などの基礎的・基本的な既習事項をどのようにつなげれば解決に向かうのか、見通しを持って考えることができる。

(2) 展 開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
5分	1. 既習事項の復習をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに学習した基本事項を確認し板書することで、班活動でつまったときのヒントになるように工夫する。 ・本時の学習を提示する。 ・どれくらいできるかを自ら知るためにあえて助言は行わない。 ・数学が苦手な人には難易度の低いところになるようお互いが配慮して決めるように伝えることで、一人一人の意欲につなげる。 		
10分	2. 課題を把握し、個人で解く。			
5分	3. 生活班になり、研究担当を決める。			

15分	4. 研究班で担当場所を研究する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 解き方の見通しが立たない研究班には助言を加えることで解決に導く。 ・ 早く解法にたどり着いた班には、ホワイトボードにどの情報を書けば班員が分かりやすくなるのか工夫させる。 	○ 見方や考え方 課題解決の道筋を予想し、それが正しいことを既習事項に帰着させて考えることができる。	観察・ホワイトボード
10分	5. 生活班に戻り、研究してきたことを一人一人が発表し、まとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班員の解法をもとに今日の課題を解決することを伝え、発表に意欲的に耳を傾けるように工夫する。 ・ 次時には評価テストを行うことを伝え、班員の説明に耳を傾けられるように配慮する。 		
5分	6. 本時のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時のまとめを行い、次時につなげる。 		

(3) 評価及び指導の例

「十分満足できる」と判断される状況	解決の道筋を予想するだけでなく、ホワイトボードを活用し、どのように説明したらさらに理解が深まるのかを考えることができる。
「おおむね満足できる」状況を実現するための具体的な指導	課題解決の道筋を予想できない生徒に対して、板書を確認させ、どれを選択すれば課題の解決に向かうのかアドバイスをする。

総合的な学習の時間（グローバル）指導案

徳島県立川島中学校

1. 実施日時 平成29年2月6日（月） 第5時限
2. 学 級 1年1組（30名）
3. 主 題 Let's write a letter in English!
4. 単元について

(1) 教材観

近年若者の海外留学が減少している。国際化が急速に進む社会において異なる文化を持つ人たちとの交流を避けることはできない。本校は以前よりオーストラリアの高校と交流があり、9月には海外語学研修の受け入れを行った。その際1年生は、英語で剣道の仕方を教え、一緒に所作の練習を行った。また、今年度は台湾からの修学旅行生と交流を図る機会もあり、生徒たちはそれぞれの言語でのあいさつの仕方を教え合ったり、クリスマスの飾りを折り紙で折ったりする活動を行った。これらの交流を通して、日本以外の国に興味を持つだけでなく、英語の重要性にも気づくことができたようである。そこで、交流した台湾の生徒からの手紙に返事を書くこと等により、英語での手紙や封筒の書き方について学び、自分たちとは異なる文化や地域への興味・関心を広げさせたいと考え、本単元を設定した。

(2) 生徒観

入学してから約1年が経とうとしており、さまざまな学校行事を通じて、互いのことを知り、自分の居場所や役割を認識しつつある。クラスの雰囲気は明るく、積極的に授業にも取り組んでいる。授業中の教師や他の生徒の発言にも素直に反応し、自分の意見を発表できる生徒もいる。なかには将来留学を希望している生徒や英語や外国に興味を持つ生徒もたくさんいる。そこで、今回の英語で手紙を書く活動を通して、他国の習慣や文化を調べることで、より興味・関心を深め、他国を尊重する心を育みたい。

(3) 指導観

グローバル化が進み世界が近くなったと言われる今、国際社会に生きていく生徒たちに、自国のことだけでなく広く世界に目を向け、進んでコミュニケーションを図ろうとする気持ちを育てることが重要である。12月に台湾からの修学旅行生と交流を図り、共に活動する中で異文化への理解や興味を深めることができた。お互い言語があまり通じないなかでジェスチャーや簡単な英語を用いてコミュニケーションを図ることで、伝わる喜びや理解する楽しさを感じたようである。本単元の学習では、交流を行った台湾について自分が興味のあることを調べ、情報を収集し、まとめ、その情報をグループ内で交換する。さらに、台湾の中学生からの手紙に返事を書くことで、自分の考えや思いを伝えるためのスキルを身に付けさせ、豊かな表現力を育むような活動としたい。

5. 単元の目標

外国の生徒との交流活動を振り返り、自分たちとは異なる文化や地域への興味・関心を広げるとともに、広く世界に目を向け、進んでコミュニケーションを図ることができる。

6. 単元の評価規準

A 積極的に言語活動を行うことでコミュニケーション能力を身に付けるとともに、国際理解を深

めようとしている。

[関心・意欲・態度]

B 国際社会に生きる日本人としての生き方について考えることができている。 [思考・判断]

C 調べたものをまとめ、聞き手に伝わるように発表することができる。 [技能・表現]

D 外国の生活や文化について知識を深め、見聞を広げている。 [知識・理解]

7. 指導計画

小単元名(時数)	学 習 活 動	評価基準と方法	
交流活動を振り返る (2時間)	・単元ガイダンスでねらいを知り、学習の見通しを持つ。 ・生徒にアンケートを実施し、課題を設定する。	B	アンケート ワークシート
台湾について調べる (3時間)	・外国の文化や習慣について、情報の収集や整理・分析を行う。 ・調べたことについてグループ内で共有する。	C・D	行動観察 ワークシート
台湾の中学生にメッセージを書く (3時間)	・英語での手紙の書き方を知る。 ・手紙の内容を考える。(本時) ・手紙を作成し、共有する。 ・国際社会に生きる日本人の在り方について考える。	A・B	行動観察 手紙

8. 本時の目標

台湾の文化や習慣等について調べたことをもとに、台湾の中学生からの手紙の返事をグループで考える。

9. 本時の展開

	学 習 活 動	指導上の留意点	学習評価
導入 (5分)	1 前時の学習を振り返る。	・前時の学習を想起させ、本時の学習への意欲を持たせる。	
展開 (40分)	2 台湾について調べたことをグループで共有する。 3 台湾でしてみたいことや台湾の中学生に質問したいことをグループで考える。	・話し方や聞き方の視点を提示する。 ・発表を聞いて、興味をもったことや知らなかったことについてメモをとらせる。 ・ホワイトボードを使って、グループで協働して考えさせる。 ・質問を考えたグループには、質問の英語訳を考えさせる。 ・活動の停滞しているグループに対して、個別にサポートする。	○資料や説明をもとに自分なりの意見を考え、伝えようとしている。 [C] (行動観察) ○積極的にコミュニケーションを図り、手紙の内容を考えている。 [A] (行動観察・発表)
まとめ (5分)	4 本時のまとめをする。	・本時のまとめと次時の学習内容について確認させる。	

国語科（国語総合）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 5 単位
2. 実施日時 平成29年 2 月 6 日（月） 第 5 時限
3. 学 級 4 年 4 組（30名）
4. 使用教科書 高等学校 国語総合（第一学習社）
5. 単元名 文章の構成や展開を確かめ書き手の意図をとらえる（徒然草『九月二十日のころ』）

6. 単元設定の理由

〈生徒観〉前向きな生徒が多く、学習に対して意欲的に取り組む生徒も多い。しかし古典の授業となると苦手意識を持つ生徒が多く、内容の読み取りに終始してしまいがちであるため、他者との協同や相互作用を通じて自らの考えを広げ、深める対話的な学びの必要性を強く感じている。

〈教材観〉「古文入門」以降、生徒は古文の特徴、歴史的仮名遣い、基本的な古語の意味、用言の活用、係り結びの法則など古文の基本的な事項を一通り学習してきた。「ある人弓射る事を習ふに」では人生における教訓を読み取り、その教訓が現代の私たちの生活の中にも息づいていることを認識した。「九月二十日のころ」で更に読解を深め、兼好法師の考える「四季折々の自然の美しさが人間の生活に取り入れられ、豊かな日本文化を形成していたこと」を文章中の言葉や当時の生活様式を取り入れながら考えさせたい。

〈指導法〉単元の最終目標は第三者に効果的に紹介する「九月二十日のころだより」を書くことである。5人が1つのグループになり、デザイン、内容紹介、教訓、表現や登場人物のおもしろさ、どんな人に読んでもらいたいかなど役割を決め模造紙にまとめて発表する。生徒にとって、身につけた知識が定着すること、多様な表現にふれることで古典の世界と現代を結びつけさせたいと考え、本単元を設定した。

7. 単元の目標 領域 【読むこと】

- (1) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとする。 (関心・意欲・態度)
- (2) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりする。 (読む能力) 内容(1)のエ
- (3) 文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。 (知識・理解) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)のイのイ

8. 取り上げる言語活動

- ・文章に書かれた情景や心情、ものの見方を的確にとらえ第三者に紹介文を書く。

9. 単元の評価規準

- A 文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察しようとしている。 (関心・意欲・態度)
- B 文章の構成や展開を確かめ、情景や心情が効果的に表現できているかどうかを考察している。 (読む能力)
- C 随筆における表記、語句、語彙、文法の特徴について理解している。 (知識・理解)

10. 指導計画（全時間）

次	学 習 活 動	評価の規準と方法
1次 5時間	文章の構成や展開を読みとる。	評価規準C「記述の点検」
2次 2時間	文章の構成や展開を確認する。 グループ活動	評価規準B「記述の点検」
3次 2時間	文章の効果的な表現について考察し、学習を振り返り、第三者に紹介文を書く。	評価規準A「行動の観察」
4次 1時間	第三者に紹介する紹介文をクラス全体で発表する。 グループ活動（本時）	評価規準A「記述の点検」

11. 本時の目標と評価規準

文章の構成や展開を確かめ、登場人物の心情や情景が効果的に表現できているかを考察しようとしている。（関心・意欲・態度）

12. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準と実際	評価方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の目標を聞く。 本文を読む 	<ul style="list-style-type: none"> 目標を説明する。 グループの中で音読することを指示する。 		
展開 40分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 1 グループごとに「九月二十日のころだより」を発表する。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 2 他のグループの発表を聞き、内容について新たに気づいた点を書き出す。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 3 「九月二十日のころだより」を作成前と作成後と理解が進んだと思う点を書き出す。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 各グループごとに工夫した点を述べさせる。 デザイン係には内容の中で何を一番伝えたかったのかを述べさせる。 黒板に掲示された各グループの「九月二十日のころだより」を各自に見に行かせる。 新たに気づいたことを付箋に書かせ、ワークシートに貼らせる。 各自に活動を振り返らせ、新たに内容について理解が深まったと思うことを付箋に書かせ、ワークシートに貼らせる。 	「関心・意欲・態度」 文章の構成や展開を確かめ、情景や登場人物の心情、ものの見方を的確にとらえ、効果的に表現しているかを考察しようとしている。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> Cの生徒への指導の手立 他のグループで自分と同じ係の発表との違いを確認させる。 </div>	記述の点検
まとめ 5分	本時の学習内容を確認する。	新たな気づきがあったかどうかを振り返らせる。		

地理歴史科（世界史B）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 2単位
2. 実施日時 平成29年2月6日（月） 第5時限
3. 学 級 5年1組・5年2組（16名）
4. 使用教科書 詳説 世界史B（山川出版社）
5. 単元名 内陸アジア世界・東アジア世界の形成

6. 単元設定の理由

〈生徒観〉本クラスの生徒は、年代や人物名など知識を問う発問に対し、教科書や資料集をもとに何とか答えようとしている。また、「なぜか」などの思考を問う発問に対しては、一人では自信のない生徒もペアワークを行うことによって協働して意見を深め合い、答えを導き出そうとするなど、主体的に授業に取り組む姿勢がみられている。

〈教材観〉この単元では内陸アジアと東アジアの関係に重点が置かれ、日本を含む東アジア世界と内陸アジア世界の形成過程について取り扱う。異なる地域に住むそれぞれの民族の特色を写真や資料で捉え、それぞれがどのような交流や抗争をくりひろげたのかを生徒に理解させることによって、東アジアと内陸アジアの歴史を地理的条件と関連付けながら文化の多様性や地域社会の特質を考察させることができる単元である。

〈指導観〉この単元では中国農耕民だけでなく北方遊牧民や西域のオアシス民の動向等について、写真や資料などを活用し、風土や気候などの地理的条件との関連を意識させることにより、各世界の形成過程につながる因果関係を考察させたい。また、同じ農耕民である日本や朝鮮半島と中国との関係を時代ごとに整理させ、中国を中心として成立した東アジア世界について考察させたい。

7. 単元の目標

内陸アジア世界や東アジア世界の形成について関心を高め、これらの地域の形成過程や諸民族の活動についての基本的な事柄を理解し、その特徴を写真や資料から読み取り、風土や生活様式がそれぞれの地域の歴史とどのように関連しているのかを考察できる。

8. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
内陸アジアや東アジアの諸文明が自然環境に適応しながら築き上げられたことや、隣接する地域世界が相互に影響し合ってきたことに対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	日本を含む東アジア世界・内陸アジア世界の形成過程及び中華文明や東アジア諸民族の特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	内陸アジアや東アジアの諸文明の特質に関する資料から有用な情報を適切に選択して、因果関係で結びつけたりするなどの活動を通して、世界史の時間的なつながりに着目して整理している。	日本を含む東アジア世界と内陸アジア世界の形成過程についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

9. 指導計画

第3章 内陸アジア世界・東アジア世界の形成

- 第1次 草原の遊牧民とオアシスの定住民…………… 1時間 【思】 【技】 (本時)
- 第2次 北方民族の活動と中国の分裂…………… 2時間
 北方民族の動向, 分裂の時代, 社会経済の変化…………… 1 / 2 【関】 【知】
 魏晋南北朝の文化, 朝鮮と日本の国家形成…………… 1 / 2 【思】 【技】
- 第3次 東アジア文化圏の形成…………… 4時間
 隋の統一と唐の隆盛, 唐代の制度と文化…………… 2 / 4 【思】 【知】
 唐と隣接諸国, 唐の動揺, 五代の分裂時代…………… 2 / 4 【関】 【技】

10. 本時の目標

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
	中国農耕民と遊牧民, オアシス民の関係について, それぞれの住む地域の風土や生活の特色から考察した結果や過程を, 適切に表現している。	草原地帯の遊牧民や中央アジアのオアシス民の生活の特色を写真や資料から読み取っている。	

11. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体的評価規準	評価方法
導入 10分	○根拠をもとに, 3枚の写真から中国の写真を選んでいる。	○これまでの学習で得た知識や情報から判断できるように, 助言する。		
展開 35分	○写真等から北方遊牧民, 西域オアシス民, 中国農耕民の生活の特色を読み取りワークシートに記入する。 ○北方遊牧民や西域オアシス民と中国農耕民がどのような交流をしていたのか, 読み取った事象をもとに自らの考えをまとめ, ワークシートに記入する。	○記入が少ない場合は, 自然環境を反映している服装や髪型等に注目させる。 ○「交流」「略奪」「支配」について, 三者の固定的関係性を示したのではなく, 変化するものであったことに注目させる。	○資料や写真をもとに自然環境との関わりから, それぞれの住居や服装, 食料などの生活様式や交通手段の特色などを読み取っている。(資料活用の技能) ○各地域の風土や生活の特色を根拠として, 三者の交流や略奪, 支配の関係について因果関係をもとに表現している。(思考・判断・表現)	行動観察 ワークシートの記述 行動観察 ワークシートの記述
まとめ 5分	○本時の学習内容を確認し, 次回の学習について見通しを持つ。	○遊牧民が侵入し, 華北に遊牧国家が成立したこと, その後の漢人の動きについて, 次時の学習にむけて予想させる。		

数学科（数学Ⅰ）学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 4 単位
2. 実施日時 平成29年 2 月 6 日（月） 第 5 時限
3. 学 級 4 年 2 組（33名）
4. 使用教科書 新編数学Ⅱ（数研出版）
5. 単元名 複素数と方程式
6. 単元設定の理由

42HR は、一つひとつの問題に自力で取り組む姿勢はあるが、数学に苦手意識を持っていたり、他者と話し合っただけで粘り強く一つの課題解決へ向かうことが苦手であったりする生徒が多い。そのため、班で数学の学習をする活動を積極的に授業に取り入れ、人と話し合っただけで学習する意義や数学の楽しさを体験する必要があると思われる。そこで、今回の単元によって複素数について学び、2 次方程式の解について学び直しを図るとともに、解と係数の関係の意味や成り立ちは数学が苦手な生徒であっても比較的容易に理解しやすくと考えられるので、しっかりと自分自身の力で解くことで数学に対する自信に繋げたい。また、他の生徒と互いに説明し合うことで理解を深めて、他者と協働しながら問題解決を図る力を育成したいと考えている。

7. 単元の目標

複素数や解と係数の関係について理解し、2 次方程式の考察に活用して問題解決ができるようにする。

8. 単元の評価規準

(ア) 関心・意欲・態度	(イ) 数学的な見方や考え方	(ウ) 数学的な技能	(エ) 知識・理解
① 複素数や負の数の平方根について興味を示し、意欲的に計算に取り組もうとする。 ② 2 次方程式の解が虚数になる場合もあることに興味を持ち、積極的に解を求めたり判別式を利用しようとする。 ③ 解と係数の関係、対称式に興味を持ち、それらを問題解決に利用しようとする。	① 複素数の表記や相等について理解し、四則計算の結果が複素数であることを理解している。 ② 2 次方程式の解を複素数の範囲で考察できる。 ③ 2 次方程式の 2 解の和、積と、係数の関係を理解できる。	① 負の数の平方根を含む式の計算を、 i を用いて処理することができる。 ② 対称式を基本対称式で表して、式の値を求めることができる。 ③ 2 次方程式の解の符号に関する問題を、解と係数の関係を利用して解くことができる。	① 複素数について理解し、2 次方程式の考察に活用できる。 ② 解と係数の関係を使って、対称式の値や 2 次方程式の係数を求めることができる。 ③ 2 次方程式の解を利用して、2 次式を因数分解できる。 ④ 2 数を解とする 2 次方程式を作ることができる。

9. 指導計画

時間	ね ら い	単元の評価規準	評価方法
第1次 (2時間)	複素数とその計算 ・複素数の表記や相等について理解し、四則計算ができる。 ・負の数の平方根を含む式の計算を、 i を用いて処理できる。	ア①, イ①, ウ①, エ①	行動観察 確認テスト
第2次 (2時間)	2次方程式の解 ・2次方程式の解が虚数になる場合もあることを理解し、判別式も利用できる。	ア②, イ②, エ①	行動観察 発問
第3次 (2時間)	解と係数の関係 (本時1 / 2時間) ・解と係数の関係を使って、対称式の値や2次方程式の係数を求めることができる。 ・2次方程式の解を利用して、2次式を因数分解できる。 ・2数を解とする2次方程式を作ることができる。	ア③, イ③, ウ②③ エ②③④	行動観察 発問 確認テスト

10. 本時の指導目標

解と係数の関係を理解して活用し、対称式を基本対称式で表して式の値を求めることができる。
また、他者と協働しつつ主体的に問題解決に取り組むことができるようにする。

11. 本時の展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
導入 (2分)	○本時の学習内容を知る。	○本時の学習内容を説明する。		
展開 I (45分)	<p>Q 1. 次の2次方程式の解を求めて2解の和と積を求めよ。</p> <p>① $x^2 - 2x - 3 = 0$, $x^2 - 6x + 9 = 0$, $2x^2 + 7x + 3 = 0$, $4x^2 + 20x + 24 = 0$ ② $3x^2 + 5x + 1 = 0$ ③ $7x^2 - 2x - 3 = 0$ ④ $2x^2 + x - 5 = 0$ ⑤ $6x^2 + 2x - 1 = 0$</p>			
	○各班, 問題①～④を(5人の班へは⑤も)分担して解く。	○各班へ問題①～④を(5人の班へは⑤も)配布して分担して問題を解かせる。 ○机間指導し, 適宜ヒントを与える。重解は値が同じ2解とみなすように伝える。 ○答え合わせをする。	○班活動に積極的に参加できているか。 (関心・意欲・態度)	○ワークシート ○行動観察
	<p>Q 2. 2解の和, 積と2次方程式を見比べて気づくことは?</p>			
	○班ごとに意見をまとめる。			

<p>Q 3. 2次方程式 $ax^2 + bx + c = 0$ の2解を α, β とすると, $\alpha + \beta = -\frac{b}{a}$, $\alpha\beta = \frac{c}{a}$ となることを証明せよ。</p>			
○各自で証明を考える。	○机間指導し, 適宜ヒントを与える。		
<p>Q 4. まなボードを使って, 証明を説明し合ってみよう。</p>			
○班内で2人ペアを2つ作り (5人の班は2人と3人に分かれ), 説明の順番を決め, 教師の説明を聞いた後, まなボードを使って説明し合う。	○できた生徒がいれば発表させ, いなければ教師が説明してから, 生徒どうして説明させる。		
<p>① 2次方程式 $x^2 - 4x + 5 = 0$ の2つの解を α, β とするとき, 次の式の値を求めよ。 (1) $\alpha^2 + \beta^2$ (2) $\alpha^3 + \beta^3$</p>			
<p>② 2次方程式 $x^2 + 3x + m = 0$ の1つの解が他の解の2倍であるとき, 定数 m の値と2つの解を求めよ。</p>			
○各自問題に取り組む。 ○班員4(5)人のうち, 2(3)人は①, 残りの2人は②の解答をみて答え合わせをして, 他の生徒へ説明できるようにする。 ○互いに説明し合う。	○班員4(5)人のうち, 2(3)人には①, 残りの2人には②の解答を与えて, 生徒どうして説明させる。適宜ヒントを与える。	○解と係数の関係を問題解決に活用できているか。 (知識・理解)	○ワークシート ○行動観察
まとめ (3分)	○本時を振り返り, 自己評価カードを提出する。	○生徒各自に自己評価をさせる。	

総合的な学習の時間 学習指導案

徳島県立川島高等学校

1. 履修単位数 1単位
2. 実施日時 平成29年2月6日(月) 第5時限
3. 学級 4年1組(33名)
4. 使用教材 高校生のための「研究」ノート(学事出版)
5. 単元名 「課題研究」の方法を学ぼう
6. 単元設定の理由

本校では「総合的な学習の時間」において、生徒一人一人の自己実現のために、「生きる力」を身につけさせ、社会に貢献できる人物を育成することを目標としている。物事に対して問題意識を抱き、自らの身近な事柄にも「課題」を見出す課題発見力は、現代の高校生にこれから求められる力の一つである。生徒達は、中学校で調べ学習の経験を積み、資料を収集して模造紙にまとめ、発表するという一連の流れを身につけている。しかし、調べた情報を羅列することに止まり、そこに課題を発見して考察するまでに至らないことが多い。そこで、これまで身につけた調べ学習のスキルをさらに発展させ、他者と協働しながら課題研究に取り組む基礎を培うために、本単元を設定した。

7. 単元の目標

- ・職業に関する調べ学習および発表に、グループで協力して取り組むことができる。
- ・課題研究における「課題(テーマ)設定」の方法を身につける。

8. 単元の評価基準

- A 職業調べの発表に対する「質問」の作成や、課題研究のテーマ設定ができる。
【よりよく問題を解決する資質や能力】
- B 進路選択に関わる職業や、身近な学びの素材である校歌について、新しい知識や見解を得ることができる。
【学び方やものの考え方】
- C グループ活動の中で、自分の役割を見つけて参加できる。
【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】
- D 自分の興味がある分野の職業について調べたり、好きな教科から「課題」にアプローチしたりすることによって、将来を意識して学ぶことができる。
【自己の在り方生き方】

9. 指導計画

次	学 習 活 動	評価の規準と方法
1次 3時間	グループで職業調べを行い、模造紙にまとめて発表する。	評価規準A・C・D「行動の観察」 「自己評価」
2次 1時間	職業調べの発表に対する「質問」を考え、調べ学習と課題研究の違いを学ぶ。	評価規準A・B「記述の点検」 「行動の観察」
3次 3時間	川島高校の歴史や地元の風土に関わる「校歌」について課題研究のテーマを設定し(本時2/3)、研究計画を立てる。	評価規準A・C「記述の点検」 「行動の観察」

10. 本時の目標

- 川島高校の「校歌」に関する課題研究のテーマを考え、グループでまとめて発表することができる。

【よりよく問題を解決する資質や能力】

【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】

11. 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
導入 (5分)	前時を想起し、本時の目標を確認する。	パワーポイントのスライドで目標を示す。		
展開 (40分)	<p>1. 「校歌」の歌詞について、「気になること」を挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初は個人で考える（3分間）。 次にグループで意見を共有し、その「気になること」はどの教科からアプローチできるか、分類する。（10分間） <p>2. グループで出た「気になること」の中から「研究テーマ」にするものを選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「研究テーマ」の設定に大切なポイントを確認する。 <p>3. グループで作成した研究テーマを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイントのスライドで「校歌」の歌詞を示す。 ワークシートとマジック、付箋を配布し、各自が思いつく点を書き出させる。 グループのワークシート（ボードに貼付）に各自の付箋を貼るよう指示する。 教科は複数になってもよいし、〇〇(教科)を使って研究したいということから、さらに付箋（ピンク色を使用）を作成してもよいことを伝える。 テーマ設定のポイントをパワーポイントで示す。 テーマは発表用のホワイトボードに大きな文字で書かせ、設定の理由はワークシートに記入させる。 研究テーマとアプローチするための教科、テーマ設定の理由を発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 校歌について、「気になること」を挙げるができる。【よりよく問題を解決する資質や能力】 <p>Cの生徒への指導の手立て 歌詞の中で気になる言葉を探すように促し、「なぜ〇〇は～か？」という形で疑問を挙げさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループの話し合いに積極的に参加しようとしている。【主体的、創造的、協働的に取り組む態度】 <p>Cの生徒への指導の手立て グループ活動に参加できていない生徒には、自分の意見を確認し、他の人の意見もよく聞くよう促す。</p>	<p>行動の観察 記述の点検</p> <p>行動の観察</p>
まとめ (5分)	本時の学習内容を振り返り、自己評価を行う。	ワークシートの自己評価欄を記入、提出させる。		記述の点検

I フィールドワークを中心とした課題研究の進め方

1. 研修日時等

研修日 平成28年11月8日（火）

講師 徳島大学総合科学部 准教授 内藤直樹 氏

参加者 教頭 石丸憲治 教諭 佐藤初恵 教諭 川人博子 教諭 近藤奈都

教諭 石川亜紀 教諭 佐藤智洋

2. 研修内容

(1) フィールドワークとは

実験は、統制された環境のもとで、事象の因果関係を理解する方法である。たとえば、ひまわりを日向と日陰におき、日照量以外の条件は統一した環境のもと、その生長の様子を観察することにより、ひまわりの成長と日照量の因果関係を明らかにしようとする場合が実験である。

これに対し、フィールドワークでは、統制されない環境で起こる現象を観察することにより、新たな知見を見いだそうとするものである。たとえば、統制されない環境である自然で生活をしているサルを観察した結果、一頭のサルがサツマイモを洗い始め、次第に他のサルも同様の行動をとるようになったことを発見し、文化を持たないとされていたサルにも文化があると見いだしたような場合がフィールドワークの例である。

フィールドワークの技法としては、文献調査と現地調査がある。文献調査では、インターネット、統計書、研究論文、新聞などをおして、自分たちが興味をもったテーマに関して、どのような情報が流通しているか、どのような現状にあるかを調べる。現地調査では、アンケート調査、聞き取り調査などをおして集めたデータや資料を統計的な手法やトランスクリプションを用いて分析する。

課題研究では、関心があるテーマに関して当初はどのように考えていたかをベースにして、主に文献調査で調べたことに基づき仮説を立て、統計資料や聞き取り資料をもとに仮説を検証する。そして、検証の過程をまとめ、何がわかったかを論理的に立証する。

(2) 大学での実践例

「徳島県南部沿岸部における防災・減災ボランティア活動の展開」というテーマで、課題解決型授業を行った。

まず、文献調査を行い、徳島県南部沿岸部の津波想定が変更され、防災対策が急がれることを知った。そして、現地に出向き調査を進める中で、この地域では自主防災組織がいち早く機能し、地域住民によるボランティアな避難道の構築がすでになされていることを知り、なぜそのようなことができたのかを調べることになった。

そこで、「マイ避難路」の地理的特徴の調査、「地元の有志」とはどのような人々かの調査、実際に避難路づくりに取り組んだ方のインタビューなどを行った。その結果、新たな災害リスクを契機に地域の内外のアクターによるネットワークが形成され、レジリエンスにとって重要な「や



る気」や「幸福感」という精神的な部分が大切にされ自主的に活動しやすくなるような雰囲気ができていたことがわかった。

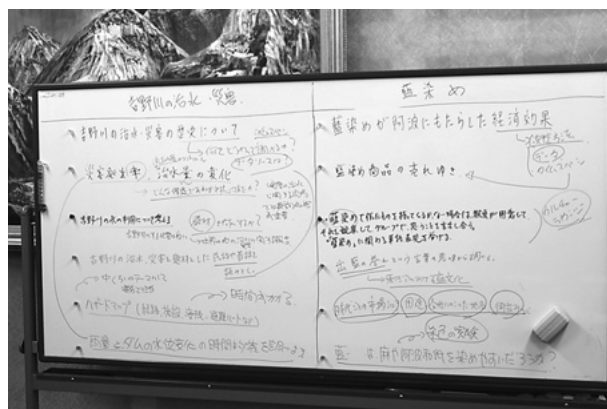
この研究をとおして、マイ避難路における課題も見つかった。たとえば、津波想定時間をもとに実際に避難実験を行ったところ、歩行困難等の災害弱者への避難支援が必要であることがわかった。そこで、ユニバーサルな避難器具の開発という研究に取り組んだ。

当初は担架を想定していたので、実証実験を行った結果、いろいろな課題が見つかった。そこで、担架を改良し、実証実験を繰り返した。そして、避難支援器具の開発という実装化につなげることができた。

(3) 実習系講義におけるテーマ設定

テーマ設定の方法には、担当教員の専門性を生かすテーマ設定、誰でも指導できるテーマ設定がある。前者の場合は、「環境」など人文・社会科学系と自然科学系のいずれからもアプローチできる共通課題を設定し、数学の先生は統計、社会の先生は社会調査、国語の先生は郷土史や資料の調査、理科の先生は環境調査というように調査手法等で差異化する。後者の場合は、だれが担当してもプロジェクトをまわすことができるプログラムをあらかじめ作っておく必要がある。

今回は、「吉野川の治水・災害について」「藍染め」というテーマで、自分の担当科目のスキルを用いて調査・観察対象・方法を考えた。たとえば、「吉野川の災害の歴史について」というテーマの場合には、どのような文献を使って調べるか、どのようなタイムスパンで調べるか、民話や昔話を聞き取り調査するかなど、研究方法を考えていく中で、だんだんと具体的な研究テーマに絞り込んでいくことが必要である、というようなご指導をいただいた。



II 実験・観察を中心としての課題研究の進め方

1. 研修日時等

研修日 平成28年11月11日（金）

講師 香川大学教育学部 教授 笠 潤平 氏

参加者 教頭 石丸憲治 教諭 中野博子 教諭 近藤奈都 教諭 佐藤智洋

2. 研修内容

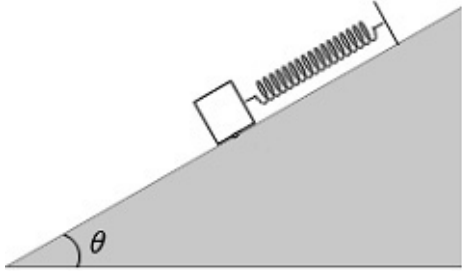
(1) 課題研究・探究活動とは

イギリスの学校では、「みなさん自身が、直ちに答えがわからず、答えを得るための決まった方法も思い起こすことができない課題に自分で取り組むもの」というように定義し指導している。そして、この活動では、「聴き手」に対して説得力のある「証拠」を示す必要がある。そのためには、データの信頼性と妥当性を常に検討する必要がある。たとえば、斜面の角度をかえて、物体がバネを引く力を調べることにした場合、どの班の計画がよいと思うか。データ数、データの間隔、0や90は必要かなどが話題になると思うが、この場合、どの班の計画がいいということ

よりも、その理由を話し合うことが大切であり、その過程を経て、信頼性や妥当性を高めていくことができる。

科学の研究では、自然現象など対象となるものの性質や振る舞いを科学的に明らかにしようとする。そのとき、変わるものすなわち変数に着目し、変数どうしの関係を探り、関係性が明らかになった場合、その原因やしくみについて、仮説を立て、新たな実験計画を設計し検証していく。たとえば、「柀の実が多い冬は寒い」の場合は、実の数と気温が変数であり、その関係性を調べることになる。その後、なぜそうなるのかを調べることになる。

例) どの角度を用いるか?



1班	10	30	70	90		
2班	0	30	60	90		
3班	0	10	20	30	40	50
4班	0	5	15	20	40	45
		70	90			
5班	0	20	40	60	80	

(2) 課題研究・探究活動の例

「温泉卵の研究」をテーマに、中学校の理科の授業で実践した。まずは、温泉卵の定義をして、その温泉卵をうまく作るための条件を研究することにした。次に、温泉卵ができるかどうかに影響を及ぼす可能性のある変数の候補を考える。候補としては、卵の大きさ、卵の種類、水の量、温める温度、温める時間……などが考えられる。その中から、実験者が変化させる入力変数と変化させない制御する変数とを決める。授業では、温める温度と温める時間を入力変数とし、温泉卵の出来具合との関係を調べることにした。各班ごとに温める温度と温める時間を決めて、温泉卵の出来具合を○△×で判定する。最後に、各班のデータを集め、横軸に温める時間、縦軸に温める温度をとって、温泉卵の出来具合を○△×でプロットしていくと、温泉卵を上手につくるための条件がグラフから読み取れた。これと同時に、×になった結果も、大切なデータであることに気づかせることができる。

探究活動をデザインする場合、テーマなどの生徒自身に決めさせる自由度を大きくすればするほどテーマなどを決めるための時間が多くかかるようになる。逆に、自由度を小さくして、教師が一方的にテーマなどを与えればこのような心配はいらぬが、探究活動の趣旨から考えると、できるだけ生徒の自主性を育てるように配慮しつつ、自由度を設定していく工夫が必要である。

「ビブリオバトル」実践報告

1. 書評合戦「ビブリオバトル」徳島県大会に参加して

平成28年10月23日（日）、第2回高校生書評合戦「ビブリオバトル」徳島県大会が、徳島県立総合教育センターで開催された。本校からは4年生2名が参加し、10校15名の発表者の中から、二人そろって優秀賞をいただくことができた。

(1) 「ビブリオバトル」とは

発表者が「おすすめの本」の魅力を5分間で紹介し合い、参加者全員で「チャンプ本」（一番読みたくなった本）を投票で決める知的書評ゲームである。2007年京都大学の研究室で始まり全国に広がっている。「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というコンセプトに基づき、参加者全員（発表者と観戦者）によるコミュニケーションを目的としたもので、公式ルールは次の通りである。

- ① 発表者（バトル）が読んで面白いと思った本を持って集まる
- ② 順番に一人5分間で本を紹介する
- ③ それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う
- ④ 全員の発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする

プレゼンテーションでは、「自分とその本との出会いや関わり」「その本を薦める理由」「自分でその本をどう読んだのか」「感動したところ、面白かったところ」「好きな登場人物」「印象に残った言葉」「作者について」「どんな人に読んでもらいたいか」などについて語る。またディスカッションでは、「どんなときに読んだのか」「なぜその人物に惹かれたのか」「その本を読んで自分はどう変わったのか」「表紙についての説明」など観戦者がもっと知りたいと思ったことについての質問に答える。

(2) 徳島県大会について

徳島県では2回目の開催となる今回の「ビブリオバトル」では、3グループ（5名ずつ）に分かれて予選を行い、各グループの代表者2名、計6名による決勝戦（大ホールでの発表）を行った。その中から優勝（チャンプ本）、準優勝、優秀賞が選ばれた。

本校の参加者2名は、「漱石さんの俳句～私の好きな五十選」（大高 翔 著）と「君の臍臓をたべたい」（住野 よる 著）についてのプレゼンテーションを行い、自分自身の体験も交えて本への想いを熱く語った。発表後のディスカッションでは、「漱石の俳句の中で好きな俳句はあるか」「俳句が苦手だったそうだが、今は何か作るようになったか」「『君の臍臓をたべたい』というタイトルが印象的だが、その意味を自分なりにどう解釈しているか」「彼女との出会いによって彼は変わったが、彼との出会いによって彼女はどのように変わったか」という質問を受けたが、自分の言葉でしっかり答えることができた。残念ながら「チャンプ本」となり全国大会に進むことはできなかったが、プレゼンテーションの仕方などについて他校の先生方からも評価していただき、良い経験になったようだ。

(3) 徳島県大会に参加して学んだこと

「ビブリオバトル」への参加を呼びかけたところ、積極的な2名の発表者を得た。二人とも全くの初心者であったので、資料を読んだりインターネットの動画を見たりして、「ビブリオバトル」とはどのようなものかイメージを掴むことから始めた。「おすすめの本」を一冊選び、紹介文の作成に取りかかったが、原稿がまとまるまでには大変な労力を要した。読書感想文とは違って、

本を通して得た感動を聴衆に語りかけ共有するという、アウトプットを意識したものにしなければならなかったからだ。

実際に声に出して読んでみると、相手に伝わりにくいところや、言わなくてもわかるというところがたくさん出てきたので、その都度原稿を修正した。そして、プレゼンテーションのときには原稿を見ることができないので、すべてを覚えて5分きっちりに終える練習をした。最初は早口になったり、棒読みになったりしていたが、「メリハリをつけて、大きなわかりやすい声で、語りかけるように」ということに気をつけて練習を重ねた。質問についてもある程度想定して、作品についてや作者についてインターネットや図書館の本で詳しく調べた。

二人で参加できたことがお互いにとって非常に良い影響を及ぼし、内容やプレゼンテーションの仕方についてお互いにアドバイスし合い、励まし合って日々進歩することができた。直前には先生方にも聴いていただき、アドバイスを受けることができたが、放課後毎日のように、二人の友達の何人かの生徒が聴きに来てくれて、動画を撮って改善すべき点をはっきりと指摘してくれた。他のクラスや他の部活動の生徒にも協力してもらえ、中高一貫校の良さを感じた。また、大会当日は、紹介された本に興味を持った他校の生徒にも話しかけられ、本を通じた交流が自然とできていたようである。

2. 校内「ビブリオバトル」の取り組み

本校では年2回校内読書会が行われ、図書委員が中心となって参加している。6月に行われた第1回目は、学年ごとに同じ本を読んで感想文を書き発表するというものであったが、11月の第2回目は、「ビブリオバトル」形式で行い、4・5年生17名が参加した。事前に図書委員会を開き、「ビブリオバトル」のルールを説明したうえで、図書館の本か自宅にある本の中から紹介したい本を選び、感想やおすすめポイントなどの紹介文を準備してくるよう伝えた。11月18日（金）放課後、それぞれ「おすすめの本」を持ち図書館に集合した。4グループに分かれて予選を行い各グループの代表者4名で決勝戦を行った。時間は少し短縮し、3分間で本を紹介して2分間でディスカッションを行ったが、和気あいあいとした雰囲気の中で発表でき、紹介される本について興味深く聴くことができた。優勝したのは、夏休みの図書委員研修会に参加し、「ビブリオバトル」の研修を受けた4年生で、一度経験していたせいか、大変積極的に取り組むことができた。「チャンプ本」を始め、紹介された本については「図書館だより」に掲載した。

3. 今後の課題

ビブリオバトル徳島県大会に参加し、校内でもビブリオバトル形式の読書会を行ったが、できれば第1回の校内読書会からビブリオバトル形式で行ったほうが良かったと思う。ビブリオバトルは難しいものではないが、実際にどういうものか知ったうえで参加すると、よりよいプレゼンテーションができると思う。また校内でビブリオバトルを行い優勝した者が、徳島県大会に出場するという方法をとっても良いかもしれない。

今回は参加の申込をしてから、県大会出場までの期間が短く、十分な準備ができなかった。もう少し紹介する本の選定や発表原稿の作成に時間をかけられるように、夏休みごろから取りかかれれば良かったと思う。

また、観戦者も全校生徒に呼びかけたが、引率教員2名、保護者2名しか参加できなかった。ビブリオバトルへの参加を次年度につなげるためにも、もっと生徒の観戦者を増やす必要がある。校内読書会などを通して、さらにビブリオバトルを啓発し、生徒が本に親しむ環境づくりを進めるとともに、言語活動を支える活動として充実させていきたい。



実施の効果と検証

生徒・教職員対象アンケートの実施及び効果の検証

本実践研究によるホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングの効果を検証するために、アクティブ・ラーニング実施前（10月）と実施後（2月）にアンケートを行い、学習に関する生徒と教員の意識を調査した。

1 アンケート調査人数

	中 学 校				高 校				計 (全体)
	1年	2年	3年	計	4年	5年	6年	計	
第1回アンケート（H28.10.24）	58	56	55	169	153	150		303	472
第2回アンケート（H29.02.09）	51	49	59	159	154	154		308	467

2 アンケート内容

【あなた自身が、できているかどうかについて教えてください】

問1	自分が興味関心を持っている分野について、積極的に調べ記録している。
問2	自分が興味・関心を持っていない分野の情報についても、耳を傾けている。
問3	普段、新聞を読んだりニュースを見たりしている。
問4	収集した情報を比較したり、要約（まとめる）することができている。
問5	収集した情報を分析する（なぜそうなっているかを考える）ことができている。
問6	収集した情報をもとに予測を立てることができる。
問7	疑問点を自分で調べるなどして、積極的に問題を解決しようと努力している。
問8	目標を設定したら、期限に間に合うように逆算して計画を立てることができる。
問9	自分の目標達成度を客観的に分析し（なぜそうなっているかを考える）、自己評価ができている。
問10	目標達成後、新たな考え方や行動を起こし、さらにステップアップできるようにしている。

【ペアワークや班活動の際、できているかどうかについて教えてください】

問11	自分の考えを周囲の人に適切に伝えることができる。
問12	相手の意見をよく聞き、理解して自分とは異なる価値観を尊重することができる。
問13	班の仲間とともに、与えられた課題解決のために、さまざまな視点から問題を見つけ出そうと頑張っている。
問14	課題解決に取り組むとき、自分の役割を見つけ行動できる。
問15	班活動中に、班の目標が達成できないとき、新しい提案をすることができる。

3 アンケート結果

【中学生】

回	実施月	問1	問2	問3	問4	問5
第1回	思う・やや思う	70.2%	59.3%	70.9%	41.8%	60.7%
	あまり思わない・思わない	29.8%	40.7%	29.1%	58.2%	39.3%
第2回	思う・やや思う	72.2%	52.2%	69.8%	43.4%	55.8%
	あまり思わない・思わない	27.8%	47.8%	30.2%	56.6%	44.2%

回	実施月	問6	問7	問8	問9	問10
第1回	思う・やや思う	60.9%	66.9%	53.6%	50.9%	52.1%
	あまり思わない・思わない	39.1%	33.1%	46.4%	49.1%	47.9%
第2回	思う・やや思う	50.0%	68.6%	50.6%	47.4%	56.4%
	あまり思わない・思わない	50.0%	31.4%	49.4%	52.6%	43.6%

回	実施月	問11	問12	問13	問14	問15
第1回	思う・やや思う	69.0%	83.8%	79.0%	69.0%	44.6%
	あまり思わない・思わない	31.0%	16.2%	21.0%	31.0%	55.4%
第2回	思う・やや思う	68.6%	81.4%	79.5%	66.7%	41.7%
	あまり思わない・思わない	31.4%	18.6%	20.5%	33.3%	58.3%

【高校生】

回	実施月	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5
第1回	思う・やや思う	65.0%	32.7%	54.9%	27.8%	31.4%
	あまり思わない・思わない	35.0%	67.3%	45.1%	72.2%	68.6%
第2回	思う・やや思う	75.6%	44.5%	65.3%	39.0%	39.0%
	あまり思わない・思わない	24.4%	55.5%	34.7%	61.0%	61.0%

回	実施月	設問6	設問7	設問8	設問9	設問10
第1回	思う・やや思う	33.2%	49.3%	39.8%	34.2%	36.6%
	あまり思わない・思わない	66.8%	50.7%	60.2%	65.8%	63.4%
第2回	思う・やや思う	40.6%	59.4%	48.1%	42.9%	45.1%
	あまり思わない・思わない	59.4%	40.6%	51.9%	57.1%	54.9%

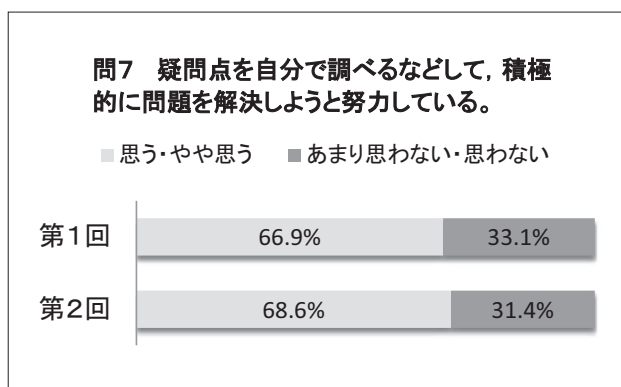
回	実施月	設問11	設問12	設問13	設問14	設問15
第1回	思う・やや思う	65.9%	75.9%	69.2%	63.9%	34.3%
	あまり思わない・思わない	34.1%	24.1%	30.8%	36.1%	65.7%
第2回	思う・やや思う	68.8%	84.1%	69.8%	66.2%	44.5%
	あまり思わない・思わない	31.2%	15.9%	30.2%	33.8%	55.5%

4 アンケート結果について

(1) 中学校

中学生については、第1回と第2回のアンケート結果に大きな差は見られない。例えば、問7の学習に対する主体性を見る設問の結果は、第1回と第2回の差は、1.7ポイントしかない。

その理由として、中学校においては、本実践研究に取り組む前からアクティブ・ラーニングを授業において多く取り入れていたことが考えられる。このため、他の設問についても肯定的な答えの割合が、高校生よりも高い。



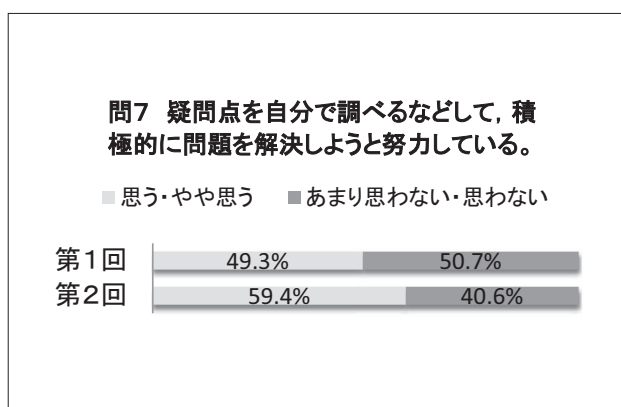
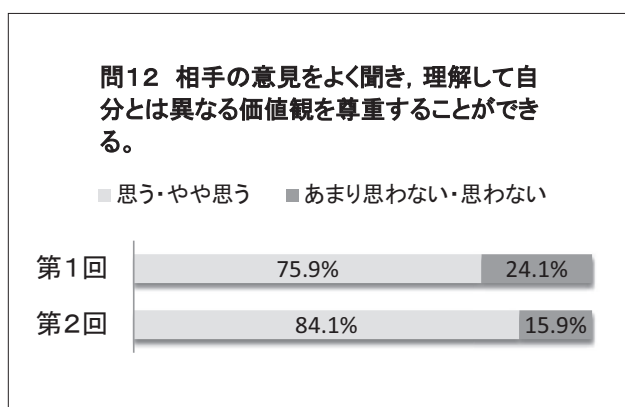
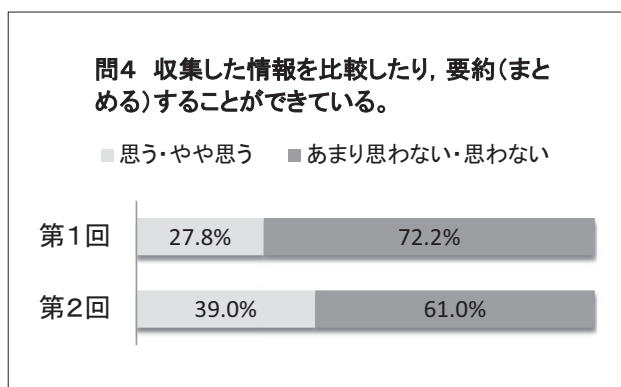
(2) 高校

高校生については、ほとんどの設問において、第1回よりも第2回のアンケート結果に肯定的な答えの割合が増加しており、本実践研究に取り組んだ成果が表れている。

例えば、問4の情報収集力を見る設問の結果は、11.2ポイント増加しており、授業において、資料を読み取りまとめるなどの機会が多くなった結果と考えられる。

また、ペアワークやグループ学習の機会が増えたことにより、問12の相手の意見を聴く力を見る設問の結果も8.2ポイント増加している。

問7の学習に対する主体性を見る設問においては、中学生に比べると肯定的な答えの割合は少ないが、第1回よりも第2回のアンケート結果が、10.1ポイント増加しており、課題解決型授業を多く取り入れた結果と考えられる。

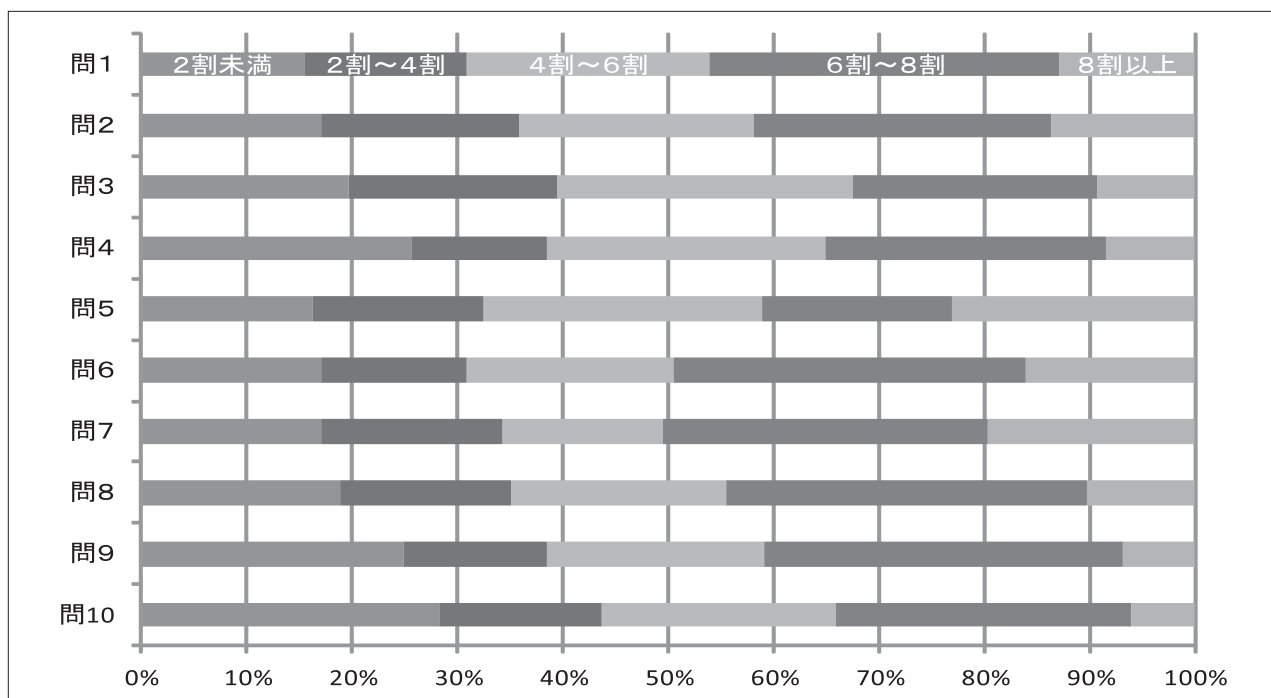


5 教職員アンケート結果

第2回アンケートにおいては、次のような教員対象のアンケートを行った。

どのくらいの割合の生徒が、できていると思うかを答えてください。	2割未満	2割～4割	4割～6割	6割～8割	8割以上
問1 興味関心を持っている分野について、積極的に調べたり体験することで情報収集している。	15.4%	15.4%	23.1%	33.3%	12.8%
問2 それほど関心を持っていない分野の情報についても、耳を傾けている。	17.1%	18.8%	22.2%	28.2%	13.7%
問3 疑問点を自分で調べるなどして、積極的に問題を解決しようと努力している。	19.7%	19.7%	28.2%	23.1%	9.4%
問4 解決困難な問題に直面したとき、解決策を二つ以上考えようとしている。	25.6%	12.8%	26.5%	26.5%	8.5%
問5 目標を設定したら、期限に間に合うように逆算して計画を立てている。	16.2%	16.2%	26.5%	17.9%	23.1%

【ペアワークや班活動の際、どのくらいの割合の班ができているか答えてください】	2割未満	2割～4割	4割～6割	6割～8割	8割以上
問6 生徒自身の考えを周囲の人に適切に伝えることができている。	17.1%	13.7%	19.7%	33.3%	16.2%
問7 相手の意見をよく聞き、理解して自己の価値観と異なる意見を尊重しようとする姿勢がみられる。	17.1%	17.1%	15.4%	30.8%	19.7%
問8 班の仲間とともに、与えられた課題解決のために、さまざまな視点から問題を見つけ出そうと頑張っている。	18.8%	16.2%	20.5%	34.2%	10.3%
問9 課題解決に取り組むとき、生徒自身の役割を積極的に見つけ行動している。	24.8%	13.7%	20.5%	34.2%	6.8%
問10 班活動中に、班の目標が達成できないとき、新しい提案をすることができている。	28.2%	15.4%	22.2%	28.2%	6.0%



教職員のアンケート結果からは、「6割以上の生徒ができている」と回答した教職員の割合が40%程度おり、主体的、意欲的に学習に取り組んでいることが伺われる。

また、問6、問7においては、「6割以上の生徒ができている」と回答した教職員の割合が50%程度おり、ペアワークやグループ活動において、適切な話し合いが行われていると考えられる。

6 現状における課題と今後の方向性（改善策）

本実践研究に取り組むまでは、ほとんどの授業が講義式一斉授業であり、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」については、一定の成果を上げていたが、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」については、不十分であった。

こうした現状のなか、平成27年度は「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「言語活動の充実に関する実践研究」、平成28年度は本事業の研究指定をそれぞれ受け、ホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングの実践に取り組み、生徒の主体的な活動・思考の活性化を図り、学びの質の改善を図ってきた。

ホワイトボードを活用した授業実践では、ペアワークやグループ学習など小集団学習を積極的に取り入れることにより、生徒同士が互いに協働して学ぶ機会が増え、「対話的な学び」が少しずつ実現しつつある。

また、講義式一斉授業から、生徒が活動する生徒主体の授業への転換を図ることで、生徒の学習への姿勢が以前よりも能動的となり、「主体的な学び」も少しずつ実現しつつある。

しかし、学んだ知識を関連づけて新たな知識を生み出したり、新たな学びを展開するなどの「深い学び」を実現するところまでにはいたっていない。アクティブ・ラーニングという形式やホワイトボードを活用することにのみとらわれて、自ら課題を発見し自ら課題を解決していける資質・能力を身に付けるという目標を忘れがちになっているところに、まだまだ大きな課題が残されている。

さらに、アクティブ・ラーニングを実践するにあたり、それぞれの科目のどの場面においてアクティブ・ラーニングを行うのかを定めるなどのカリキュラム・マネジメントを機能させる必要がある。

また、アクティブ・ラーニングにおける評価について、量的変化だけではなく質的变化を計ることのできるルーブリックを確立すること、また生徒自身が個々の学びのプロセスを評価できるようポートフォリオなどを取り入れた評価方法について確立していく必要がある。

先進校視察・フォーラム等 参加報告

桐蔭学園高等学校

桐蔭学園高等学校（神奈川県）

1. 訪問日時等

訪問日	平成28年11月12・13日		
訪問者	講師 華岡 愛文		
研修事項	12日授業見学	授業者	教諭 袴田 英康 氏 教諭 松井 講介 氏 他
	13日シンポジウム	講演者	京都大学教授 溝上 慎一 氏 大阪府立大学教授 川添 充 氏 関西大学教授 森 朋子 氏 他

2. 学校概要

学校法人桐蔭学園は、昭和39年に桐蔭学園高等学校として新設認可され、現在では創立52周年を迎えた。生徒数は、中学校・中等教育学校は各学年350名程度、高等学校は各学年900名程度と非常に大規模な学校であり、桐蔭学園全体で見ると幼稚部から大学・法科大学院までの全部で9つの学校やコースがある。部活動も大変盛んで、ラグビー部を始め様々な部が全国大会で優れた成績を残している。また、国公立大学へ200名以上、医学部へ100名以上の進学実績をおさめている。

昨年度より学園を挙げてアクティブ・ラーニングに力を入れている。高校1年、2年および中学1年、2年、中等教育学校4年、5年および1年、2年を推進学年と位置づけ、アクティブ・ラーニング研究の第一人者である京都大学の溝上慎一氏を教育顧問とし積極的かつ実践的な取り組みをしている。

3. 研修事項

(1) 公開授業

今回の研修のテーマは「アクティブ・ラーニングで育てたい力は何か」である。

桐蔭学園では、アクティブ・ラーニングを行う背景と育てたい人物像を以下のように定義している。

Google や YouTube に代表される情報メディアの発展は、私たちの知識へのアクセスを大きく変えました。いま我々は、検索型の知識基盤社会に生きていることを認識しなければなりません。知識は、人がものを考え、仕事をし、社会的生活を営んでいくうえで、依然として重要です。しかし、この社会を力強く生きるために、知識を操作する能力（活用や探究、問題解決）や、知識を介して他者や集団で活動する能力（ディスカッションやプレゼンテーション）もまた重要です。何事にも主体的に取り組み、多様性を尊重し、他者と協働するためのチームワーク、コミュニケーションの能力を備えた人材こそ、21世紀の社会に求められる人物像と言えるでしょう。（桐蔭学園 HP <https://toin.ac.jp/al/>より一部抜粋）

この理念に即して中学高校合わせて20講座の公開授業が行われた。私は、①中学校1年生の数学での連立方程式の応用についての授業②高校2年生の数学での微分法の応用についての授業の2つに参加した。

①の授業は、グループ学習を中心とした授業展開であり、問題の提示→個人→4人班→9人会議→4人班→個人という流れである。授業担当の松井講介先生によると、アクティブ・ラーニング型の授業を行うことにより、生徒が自分で問題を解くチャンスが増えたり、生徒同士で見え

せたりすることができ、授業の主役が教師から生徒になったとのことである。グループ活動に積極的に関わり、他者と協働して問題の解決方法を考えることで、他者と協力して物事を進めることのできる人間を育てたいと述べられていた。

②の授業について、本授業の最大のテーマは「反転授業」である。反転授業とは、講義の知識習得の部分を自宅学習で事前に済ませ、これまで自宅学習で行ってきた課題や自主演習を授業内で行う、いわゆる従来型の授業と自宅学習を文字通り反転させた授業である。この活動を行うことで、授業で生徒の考えや躰きに耳を傾け、「思考力」や「協働性」の育成に取り組むことができる。反転授業で重要なのは、予習の質である。本授業ではClassiというベネッセホールディングス等のシステムを利用し、授業のビデオ映像やWebテスト等のICT機器により質の高い予習を実現している。授業ではグループ学習を行っていたが、①の授業とは異なり生徒同士の説明や議論を重視していて、アクティブ・ラーニングの目的の一つある「深い学び」を実践していた。

(2) シンポジウム

シンポジウムにおいては、アクティブ・ラーニングの定義の「深い学び」ということを中心とした講演であった。溝上教授はカリキュラムマネジメントの重要性を、森教授は反転授業の可能性を、川添教授は現実生活と教科のつながりや日常生活に即した問題を提示することでより深い学びになると講演をして頂いた。溝上教授と川添教授の講演に共通することが、アクティブ・ラーニングと日常生活の関係の重視であり、現実世界で直面した問題を解決するための力を養うために深い学びを行わなければならないということである。そのため溝上教授は以下の三つの活動に取り組むべきと提示された。

- ① 習得した知識・技能を使う問題を、自ら作問して解き合う活動
- ② 複数単元からのアプローチが考えられる活動
- ③ 実社会からの抽象的、または実社会への繋がりを「体感」できる活動

単にグループ学習を行うというのではなく、身につけさせたい力を明確にし、そのためにどのようなアプローチが必要かを考えることが大切である。

(3) アクティブ・ラーニングを行う工夫・環境作り

研修会后、川添教授から質問に対する回答を頂いた。質問内容は以下の通りである。アクティブ・ラーニングを効果的に行うためには、クラスでの雰囲気づくりが必要となる。特に苦手な生徒は学習に意識を向けることが難しい。生徒たちが失敗できる環境をどのようにつくられているのか教えて頂きたい。

回答を要約すると、①生徒が現実味を感じる身近な問題と教科を結びつけて問題を提示する。②課題に取り組む上で分からないことがあれば周りや教師に聞くようにして、課題を解ききることを重視する。③直感で予想を立てさせ、それを間違えていたとき、何を間違えていたか論理的に考える活動を行うことにより、積極的に授業に取り組むように促す。生徒が興味や成功体験を積み重ねることが大切である。